

神辺御領遺跡

—神辺農業協同組合御野支所建設にかかる—

1980

広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

神辺御領遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
(目次)	11	追加	3. 瓦……29
2	7	亘	亘
3	11	追加	28. 馬場遺跡
4	18	広島県亀山遺跡発掘調査 報告	「広島県亀山遺跡発掘調 査報告」
◆	22	1973~1976年)	1973~1976年
15	7	褐粘質土	褐色粘質土
22	2	穿たれてた	穿たれていた
24	9	古式土器	古式土師器
25	6	復元	復原
32	6	67~74	67~70, 72~74
◆	12	71, 74	74

目 次

I は じ め に.....	(1)
II 位 置 と 環 境.....	(2)
III 調 査 の 概 要.....	(5)
IV 検 出 の 遺 構.....	(8)
1 南 調 査 区.....	(8)
2 北 調 査 区.....	(16)
V 遺 物.....	(21)
1 土 器.....	(21)
2 石 器.....	(28)
VI ま と め.....	(31)

図版目次

図版 1	御領遺跡周辺航空写真	図版10 a S D 01全景（東より）
図版 2 a	御領遺跡遠景（北より）	図版10 b S D 01断面
b	調査地全景（南より）	図版11 a S D 01土器出土状態
図版 3 a	S D 02全景（南より）	図版11 b S B 01全景（南より）
b	S D 06全景（東より）	図版12 S D 03出土土器
図版 4 a	S D 04全景（東より）	図版13 a S D 03 3T出土土器
b	S D 04断面	図版13 b S D 03 3T出土長頸壺
図版 5 a	S D 04土器出土状態	図版13 c S D 07出土小型丸底壺
b	同上	図版14 S D 07出土土器
図版 6 a	S D 07全景（北より）	図版15 a S D 07出土土器
b	同上	図版15 b S D 07, 01出土土器
図版 7 a	S D 03 3T全景 (東より)	図版16 a S D 01出土土器
b	S D 03 3T断面	図版16 b S D 04出土土器
図版 8 a	S X 01全景（東より）	図版17 S D 04出土土器
b	南調査区南部遺構群全景 (北東より)	図版18 S D 04出土土器
図版 9 a	南調査区調査後の状態 (東より)	図版19 a S D 04出土土器
b	北調査区遺構検出前の状 態（北より）	図版19 b (上) S D 04出土土器 (下) S D 06出土土器
		図版20 a 石器(1)
		図版20 b 石器(2)

挿図目次

第1図 御領遺跡の位置と周辺の遺跡(3)
第2図 調査区位置図(6)

第3図 調査区配置図	(7)
第4図 南調査区遺構配置図	(9)
第5図 S D 04, 07土層断面図	(10)
第6図 S D 04遺物出土状態図	(11)
第7図 S D 07遺物出土状態図	(12)
第8図 S D 03第2トレンチ土層断面図	(13)
第9図 S D 03第3トレンチ土層断面図	(13)
第10図 南調査区南部遺構群実測図	(14)
第11図 S X 01実測図	(15)
第12図 北調査区遺構配置図	(17)
第13図 S D 01実測図	(18)
第14図 S D 01土層断面図	(19)
第15図 S B 01及び土壤群実測図	(20)
第16図 S D 03出土土器実測図(1)	(34)
第17図 S D 03出土土器実測図(2)	(35)
第18図 第3トレンチ出土土器実測図	(36)
第19図 S D 07出土土器実測図(1)	(37)
第20図 S D 07出土土器実測図(2)	(38)
第21図 S D 01出土土器実測図	(39)
第22図 S D 04出土土器実測図(1)	(40)
第23図 S D 04出土土器実測図(2)	(41)
第24図 S D 04出土土器〔上〕, 須恵器〔下〕実測図(3)	(42)
第25図 S D 04(上), S D 06(下)出土須恵器実測図	(43)
第26図 石器実測図(1)	(44)
第27図 石器実測図(2)	(45)

図 表 目 次

第1表 石器計測表	(30)
第2表 各溝出土土器の消長	(33)

例　　言

1. 本報告は、昭和54年（1979）4月から6月までの間に実施した神辺農業協同組合御野支所建設地内（広島県深安郡神辺町）に係る遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は広島県教育委員会が神辺農業協同組合から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本報告は、Iを三好晴弘、IIを高倉浩一、III～VIを嶋田滋が分担執筆し、嶋田が編集した。
4. 出土遺物の整理は執筆者が分担しておこなったが、実測については執筆者以外の調査研究員がそれぞれ分担した。
5. 図面の作製は、高倉浩一、嶋田滋が行い、出土遺物の写真は、中田昭が撮影した。
6. 本報告に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。建物：S B、溝：S D、土壙：S K、その他の遺構：S X。
7. 第1図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭54中複、第167号

I はじめに

当遺跡の所在する広島県深安郡神辺町大字下御領の一帯は、かねてより埋蔵文化財包蔵地の密集する地域として知られ、特に近年は各種開発事業に伴い多くの発掘調査が実施されるようになった。

当遺跡については昭和53年秋、神辺農業協同組合が御野支所を当地に建設することを明らかにし、神辺町教育委員会を通じて県教育委員会に遺跡の有無についての照会があった。

県教委としては、当該地が御領遺跡の一角に含まれていること、昭和52年冬に広島県草戸千軒町遺跡調査研究所の手で行われた隣接地の調査では、多くの遺構、遺物が検出されていること、また、国鉄井原線に関係した発掘調査で、当地の南側に集落が確認されていることなどを考慮して、事前に発掘調査の必要があるとし、その旨を神辺町教育委員会及び神辺農業協同組合に通知した。

神辺農業協同組合との協議の結果、建設予定地約3,000m²の内、建物予定地を中心に発掘調査を行なうこととし、昭和53年12月に工事の届出が文化庁長官あてに提出された。

発掘調査は広島県教育委員会が神辺農業協同組合から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

現地調査は昭和54年4月11日から昭和54年6月9日まで行ない、調査研究員の三好晴弘、嶋田滋、高倉浩一が担当した。

なお、調査の実施にあたっては神辺町教育委員会、神辺農業協同組合、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所をはじめ多くの方々の御協力をいただいた。また、報告書の作成に際しては、出土石器の材質同定を県教育委員会指導課の福原悦満指導主事にお願いし、他の遺物については広島大学文学部考古学研究室の瀬見浩教授をはじめ、川越哲志、河瀬正利の諸先生方から御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

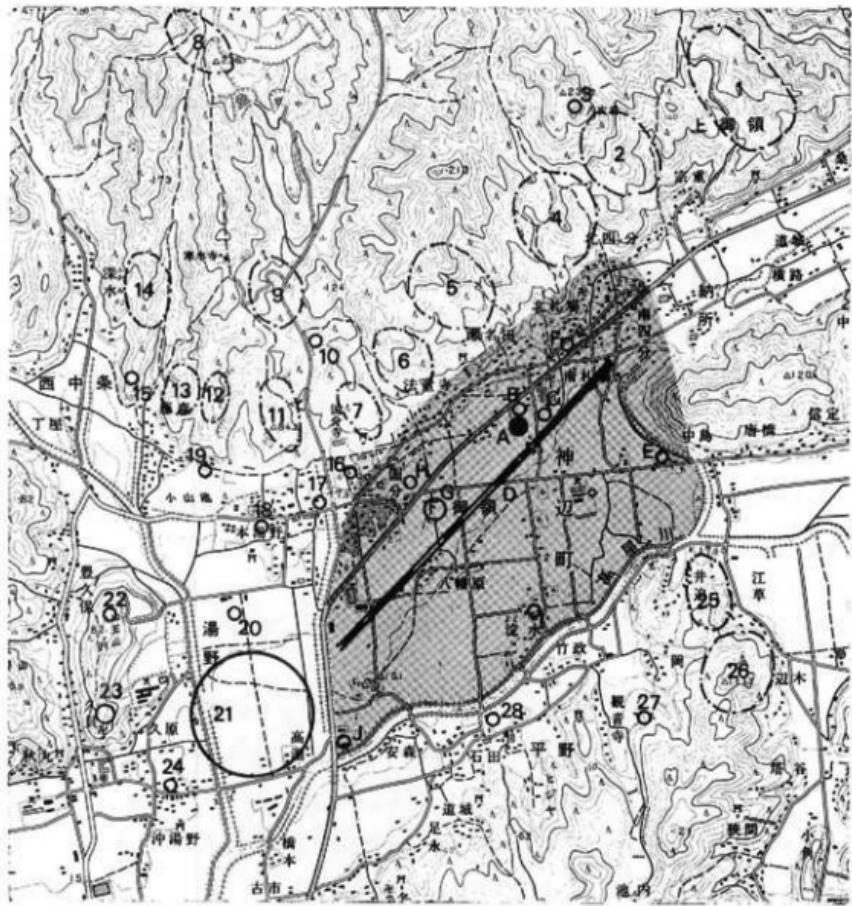
II 位置と環境

神辺御領遺跡は、広島県深安郡神辺町大字下御領に位置する。神辺町は、福山市街地より北方約10kmの位置にあり、芦田川及び高屋川流域に沿って開ける沖積地及び氾濫原上に成り立っている。神辺平野では御領遺跡の存在する一帯のみならず、その周辺の丘陵を含めて相当広汎な地域にかけて遺物が発見されており、広島県内でも有数の遺跡密集地帯として知られ、古くは、縄文時代から弥生・古墳時代を経て歴史時代へと各時代に亘って多くの遺跡が存在することが知られている。

縄文時代の遺跡は、鉢形土器を出土した御領遺跡中島丹花地点、下御領八幡原それに御領遺跡上手櫛地点があげられよう。上手櫛地点の調査の結果住居跡が一軒検出され、それに伴なう多量の石器群と縄文時代後期後半の土器がまとまって出土している。⁽¹⁾ ⁽²⁾ ⁽³⁾

弥生時代における遺跡としては、道上地区の標高38mの低い独立丘陵上に位置する⁽⁴⁾亀山遺跡、湯野地区山王山丘陵東側の水田地より発見された大宮遺跡が稻作開始期の遺跡として知られている。亀山遺跡は昭和16年に県史跡に指定された遺跡で、明確な遺構は明らかにされていないものの弥生前期から中期にかけての多量の土器や石鎌・石包丁・太形船刃石斧などの稻作農耕を示唆する石器類が発見されており、神辺平野における最初の農耕集落遺跡と考えられる。一方、大宮遺跡では広島県内では初めての⁽⁵⁾弥生前期に属する環濠及びピット群が検出されており前述の亀山遺跡とともに神辺平野における農耕社会の形成過程を示す重要な遺跡といえよう。中期になるとその亀山、⁽⁶⁾大宮遺跡の他に領家、おなか、中谷及び道上小学校校庭をはじめとして数多くの遺跡⁽⁷⁾が知られており、芦田川、高屋川の沖積化と相俟って爆発的な増加を示し、小猿崎、中条地区といった山間部の狭い谷間にも稻作可耕地を求めて集落の進出が認められる。後期では中期以上に広範囲に遺物の散布する所が数多く認められ、平野部では連続的に遺物包含層が存在している。特に御領・湯野地区では過去数度の発掘調査が行なわれているが、いずれも限られた範囲内での調査であり遺跡の性格は明らかにし得ないものの膨大な土器量とともに数多くの遺構が存在すると予想されよう。

古墳時代の遺跡は、まず平野部では弥生時代に引き続いて集落の存在が予想され、御領地区では今回調査の地点で弥生時代後期後半から古墳時代初頭へかけての溝及び古墳時代中期の溝が検出されており、1978年度調査の井原線建設予定地内の発掘調査



第1図 御領遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

御領遺跡（アミ目。但し、遺構・遺物に疎密があり大づかみな範囲である。）

A. 御野支所 B. 為金 C. おなか D. 井原線建設地内 E. 中島丹花
F. 上下 G. 上手樋 H. 古屋敷 I. 淀水 J. 高瀬

1. 上御領中組古墳群 2. 八丈岩古墳群 3. 八丈岩遺跡 4. 上御領下組古墳群
5. 下御領古墳群 6. 法童寺古墳群 7. 国分寺裏山古墳群 8. 駒ヶ爪古墳群
9. 寒水寺古墳群 10. 表山遺跡 11. 迫山古墳群 12. 藤森東古墳群
13. 藤森古墳群 14. 深水古墳群 15. 貝谷遺跡 16. 備後国分寺跡
17. 長者屋敷遺跡 18. 正殿寺遺跡 19. 小山池廐寺跡 20. 方八丁遺跡
21. 大宮遺跡 22. 山王山古墳 23. 山王山遺跡 24. 沖湯野遺跡 25. 江草山古墳群
26. 遠木山古墳群 27. 観音寺古墳

でもほぼ同時期の遺構が検出されている。一方、丘陵部では神辺平野東部南側を限る下竹田辺木山・江草の丘陵上には箱式石棺を有する辺木山古墳群（14基）、江草山古墳群（10基）対面する北部丘陵の山頂から山腹へかけては横穴式石室を有する上御領下組古墳群（22基）上御領古墳群（39基）、蘿森古墳群（6基）、箱式石棺を有する国分寺裏山古墳群（4基）など平野周辺の丘陵上には数多くの古墳群が存在し、広島県下有数の密集地帯といえよう。

奈良時代以降の遺跡では、備後國分寺跡をはじめとして小山池廃寺、中谷廃寺など奈良時代から平安時代にかけての古代寺院跡や古瓦の出土する地点が数多く存在し、⁽⁸⁾現在までに前述の遺跡の他、宮の前廃寺跡、伝吉田寺跡で調査が行なわれている。⁽⁹⁾また湯野地区方八丁遺跡では条里遺構も検出されている。中世室町以降になると、神辺城をはじめとして27を数える山城が存在しており、神辺平野は先史時代から歴史時代に至る長い間を通じて備後の中心地域として早くから開けていた地域と云えよう。

註

- 1) 神辺郷土史研究会「神辺町の歴史と文化」 1974年
- 2) 広島県教育委員会「神辺御領遺跡第1次発掘調査概報」 1976年
- 3) 注2と同じ
- 4) 松崎寿和・潮見浩「広島県龜山遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961年
潮見浩 広島県龜山遺跡発掘調査報告 「広島大学文学部紀要」第21号 1979年
- 5) 広島県教育委員会「大宮遺跡第一次・第二次発掘調査概報」 1978・1979年
- 6) 神辺郷土史研究会「弥生時代の神辺」「神辺町の歴史と文化」第三号 1975年
- 7) 注6と同じ
- 8) 広島県教育委員会「備後國分寺第一次～第四次調査概報」 1973～1976年)
- 9) 広島県教育委員会「小山池廃寺発掘調査概報」第1次・第2次、第3次 1977・1979年
- 10) 福山市教育委員会「史跡宮の前廃寺跡」 1977年
- 11) 広島県教育委員会「伝吉田寺発掘調査概報」 1968年

III 調査の概要

当該調査地は、昭和50年度に広島県教育委員会が調査区設定のために設置した基準座標軸によればEW区にあたる。（第2図）調査はまず遺構の密度、内容の概要を把握するため試掘溝を設定したところ、ほぼ全域から溝状遺構、土壌等が検出され土器などの遺物も多く出土したため地下遺構に影響のある店舗棟、事務所棟建設予定地内を全面発掘することとし、駐車場予定地は調査対象からはずした。なお調査区が南北に分かれることから店舗予定地を南調査区（以下南区）、事務所予定地を北調査区（以下北区）と呼称することとした。（第3図）

南区では溝状遺構7（SD02～08）と土壌多数が検出され、各溝状遺構からは土器を中心として弥生時代前期から古墳時代後期にわたる遺物が出土した。

SD02、04～08は調査区南半部の水田床土直下の黄褐色粘質土上面において検出されたが、北半全面には暗茶褐色粘質土の堆積がありSD04及びSD07北端が不明瞭であった。そのために調査区北東隅にサブトレーンチ（第3トレーンチ）を設けたところ、弥生時代中期の土器を多量に包含する深い溝状遺構であるSD03が検出された。このため西側にさらに2箇所のトレーンチを設定し、遺構の広がりを追った。

調査区南端中央においてはファイヤーピット（SX01）、住居跡状の土壌（SX02）等が検出されたが、土層が著しく擾乱されている上、遺物も土器細片がわずかに出土したのみであり、その時期及び性格は不明である。

北区では水田床土直下にうすく広がる植物有機体を多く含んだ暗褐色粘質土層の下から溝状遺構（SD01）と、掘立柱建物（SB01）が検出された。

SD01は人為的に掘られた如く2段の落ち込みを見せ、古式土師器が出土した。

SB01は年代を決定しうる遺物に乏しいが近世以降のものと思われる。

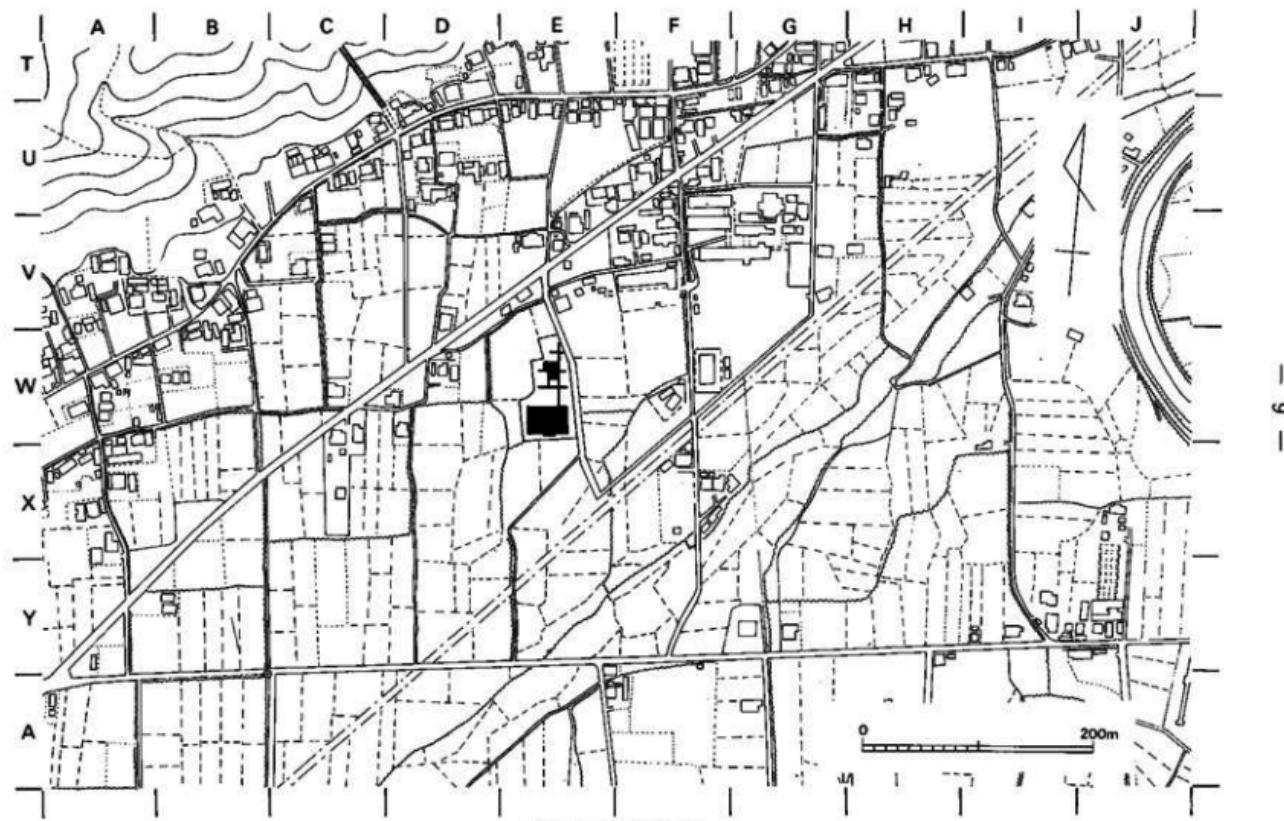
前記の暗褐色粘質土層は旧水田面の可能性もあるが、畦畔などは検出できなかった。

なお、今回の調査で特に注目されるのは溝状遺構の実態がかなり広範にわたり、しかも二重、三重の層位的な重複がみられるとともにその規模も大小さまざまであり、SD03にみられるように深く掘りさげた状態で確認されるものもある。

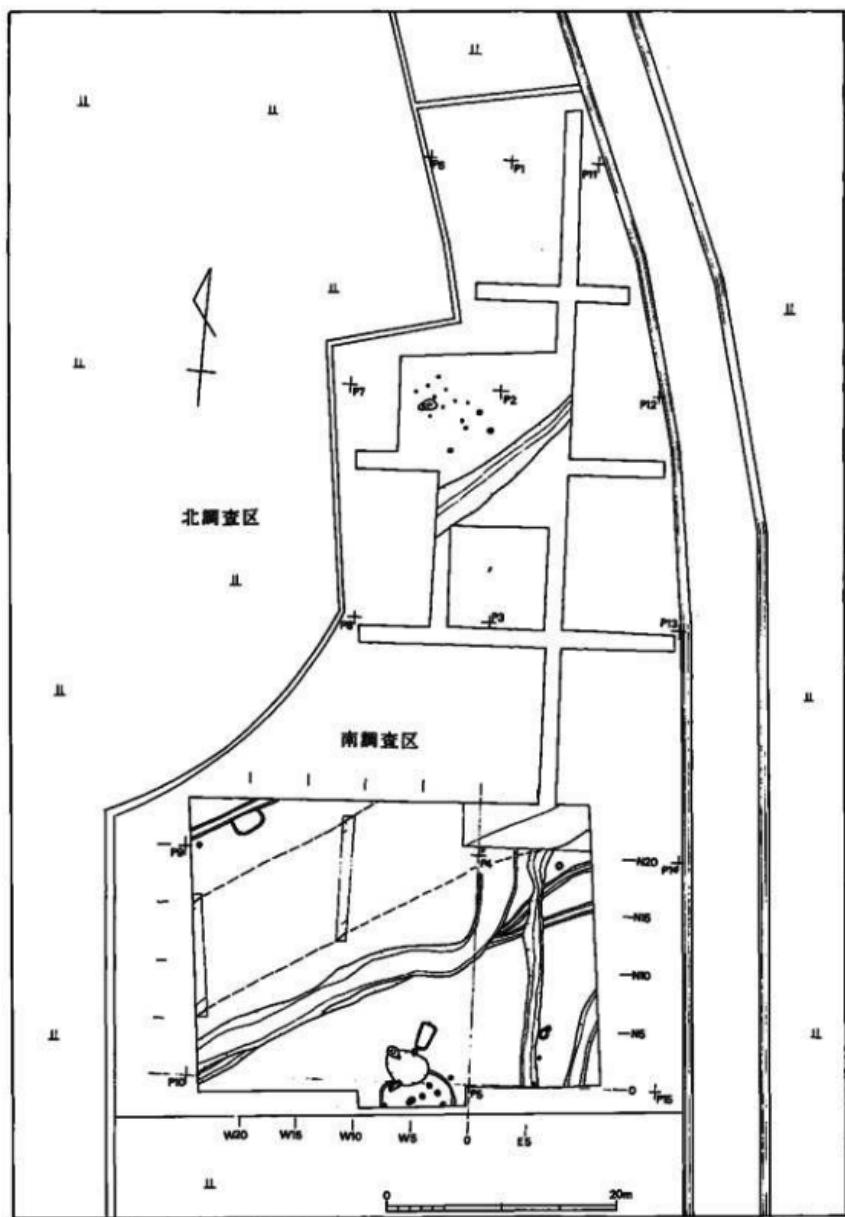
（註） 基準座標軸の原点からの距離は次のとおりである。

P10 : E223,930m, N206,488m

P15 : E264,884m, N207,127m



第2図 調査区位置図



第3圖 調查區配置圖

IV 検出の遺構

1. 南調査区（第4図、図版3～9）

溝状遺構7と土壌多数を水田の床土の下にある斑状に植物有機体を含む明黄褐色粘質土を削平していく段階で検出した。

（1）溝状遺構

溝状遺構は複雑に重複して切り合っており、上位レベルのものから調査を行なっていった。ここではその順に述べていく。

S D02（図版3a）

調査区北西部隅にあって北東から南西へ抜ける幅約1m深さ約20cmの細い溝である。南辺中央部をSK07に切られていて、前後関係は土層からもSK07が新しい。SK07は隅丸方形の深さ約25cmの浅い土壌で、埋没土はやや暗い色調の褐色粘質土である。SD02の埋没土は明青灰色粘質土の単一層であり、底位レベルは北東がやや高く、流水があったとすれば北東から南西へ流れていたと考えられる。遺物は土師器、須恵器の細片及び布目瓦片が出土したが、年代を決定するに至らない。

S D06（図版3b）

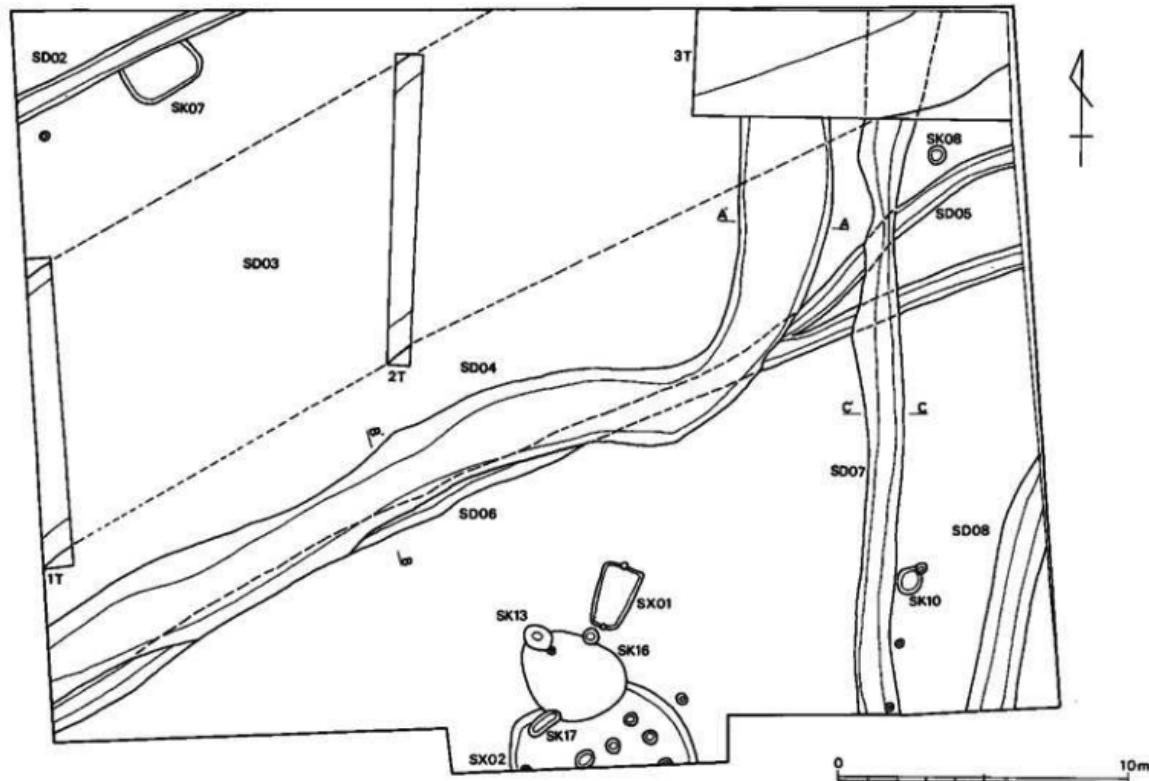
調査区の中央を北東から南西に抜ける幅約70cm、深さ約30cmの溝である。埋没土は底部に灰褐色砂礫層があり、その上に明灰褐色粘質土が乗る状態であり、溝底の高さからみて流水のあった事を示している。遺物は土師器細片及び須恵器破片が出土した。

S D05

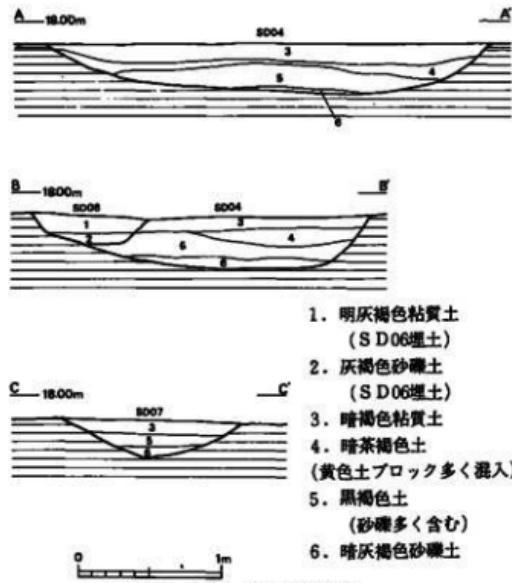
北東からSD06に合流する溝で、規模、堆積土、遺物の内容共にSD06と同一である。流水もSD06と同様である。

S D04（第5・6図、図版4・5）

SD06のかなりの部分を切られている溝で、調査区の東においては北から南へ下り、屈曲して南西方向へのびる。平均幅約2.8m、深さ40cmの比較的大きな溝である。底部には砂礫層があり、溝底の比高からみて北東から南西への流水があったと考えられる。北東部端は遺構検出面全面に厚く暗茶褐色粘質土が広がっていて溝のラインが不明瞭となっている。遺物は土師器及び須恵器が出土しているが、土師器は完形に近い甕(98)や高壺多数が出土していて特に高壺の集中した出土状態は祭祀との関連と考えさせる。



第4図 南調査区造構配置図



第5図 SD04, 07土層断面図

遺物は特に南部から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が集中して出土している。

SD08

調査区南東隅にある幅約1.5m 深さ約5~10cmの浅い溝である。遺物は土師器細片がわずかに出土するのみで性格・年代などは不明である。

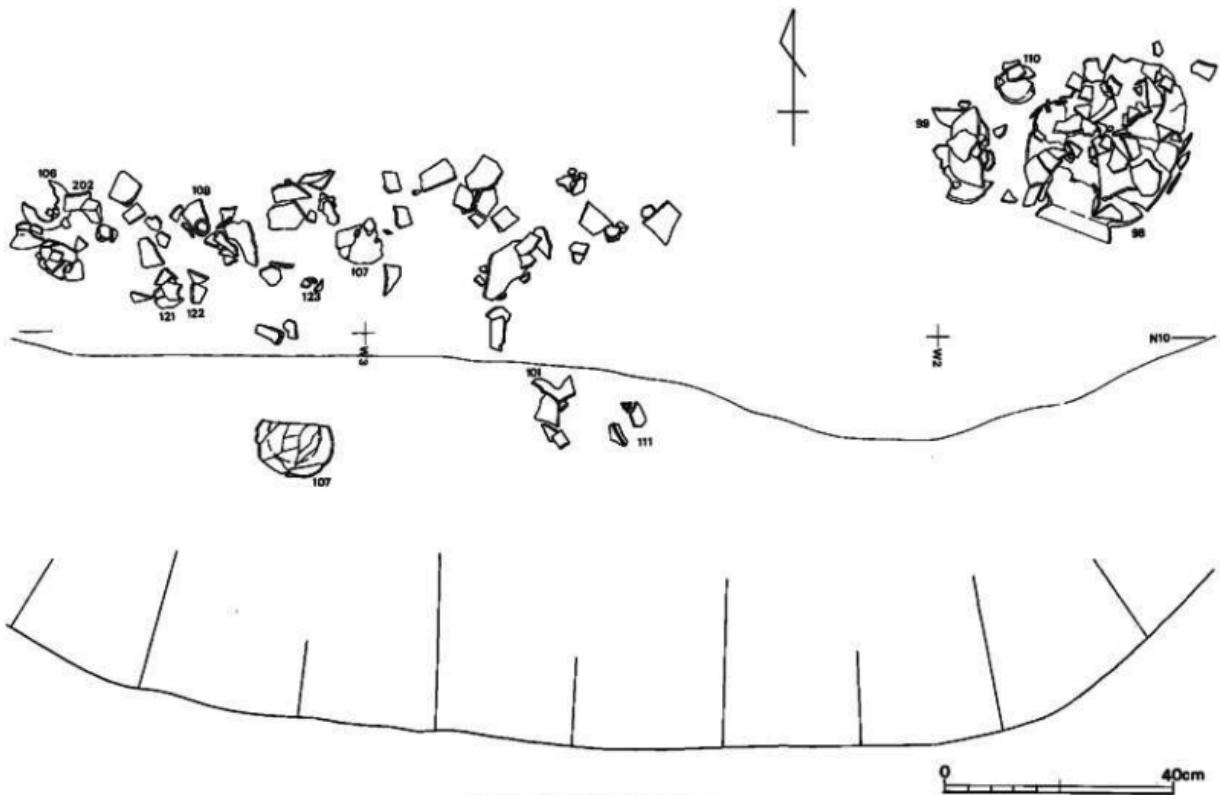
SD03 (第8・9図, 図版7)

調査区北半を北東から南西へ走る幅約10m 深さ約2m の大きな河川状の溝である。堆積土から見てかなり長期にわたって流水があったと思われ、その方向は溝底の比高からみて北東から南西である。溝底の近くは湧水が多く完掘は出来なかった。この溝はトレンチ調査のみしか行なえなかったが、第1トレンチから第3トレンチに至るまで、多量の弥生時代中期を中心とした土器が出土している。その出土状態は上部から下部に至るまで全般に見られるものであり、SD03は弥生時代中期を通じ營まれたものであると考えられる。第3トレンチではSD07およびSD04の北端部が追求されたが、土層の大規模な擾乱があったと考えるべきか、SD07に合流していたかは不明瞭のままであった。ただ第3トレンチ北壁の土層にはSD07の延長線上にSD07底部の暗灰

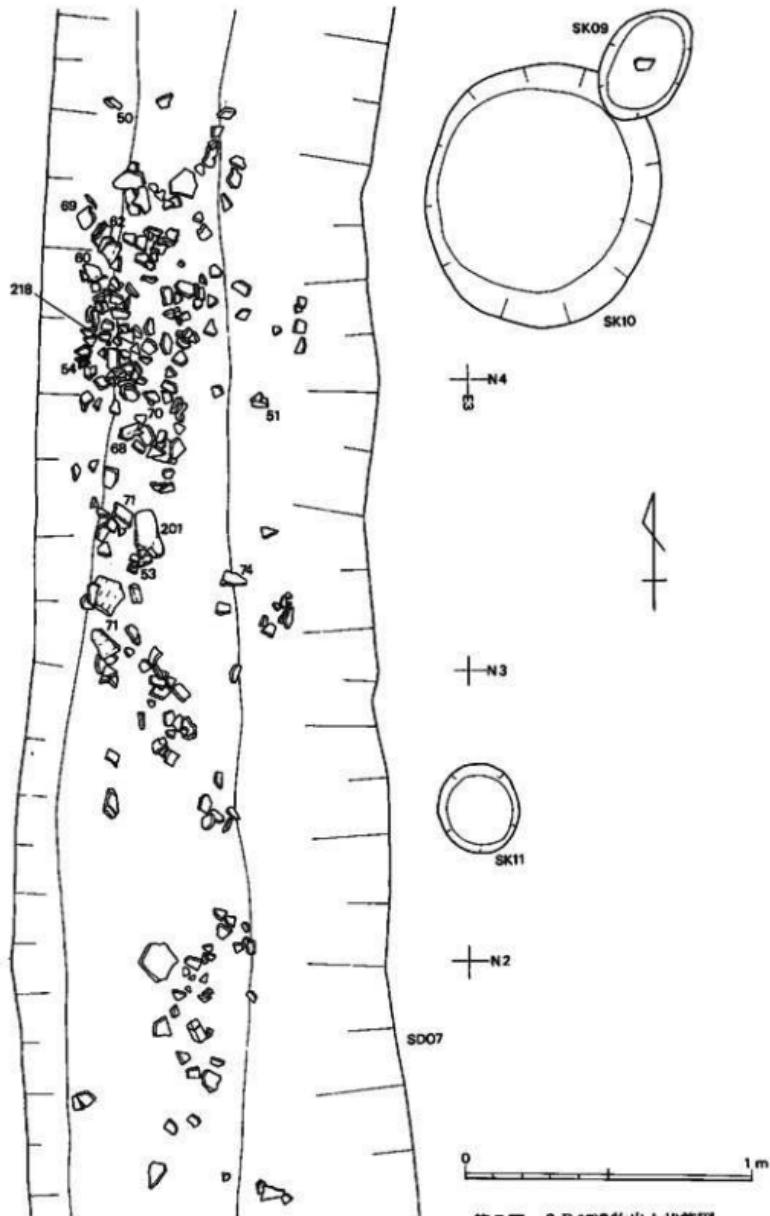
土師器の時期は古墳時代中期のものであり、須恵器の型式も古い。

SD07 (第5・7図, 図版6)

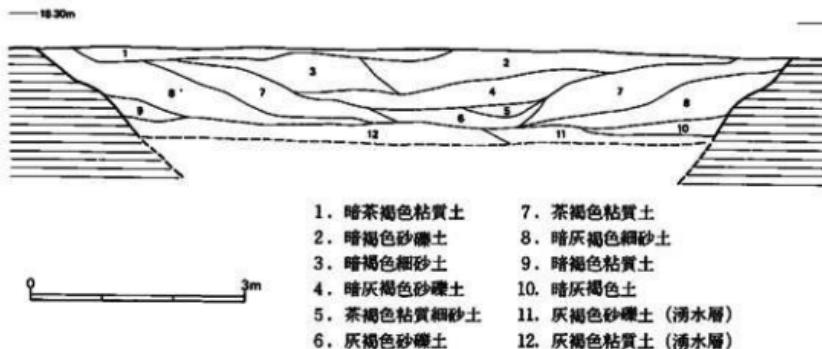
調査区東側をほぼ南北方向に走る幅約1m, 深さ約30~40cmの溝である。他の溝状遺構とは異って溝底は南に高く北に低い。土層の観察においても底部に砂礫層があり流水が南から北へあったと考えられる。北端部においてはSD04の北端と同じく暗褐色土が広く造構検出面をおおってプランは不明瞭になる。



第6圖 SD04遺物出土狀態圖



第7図 SD07遺物出土状態図



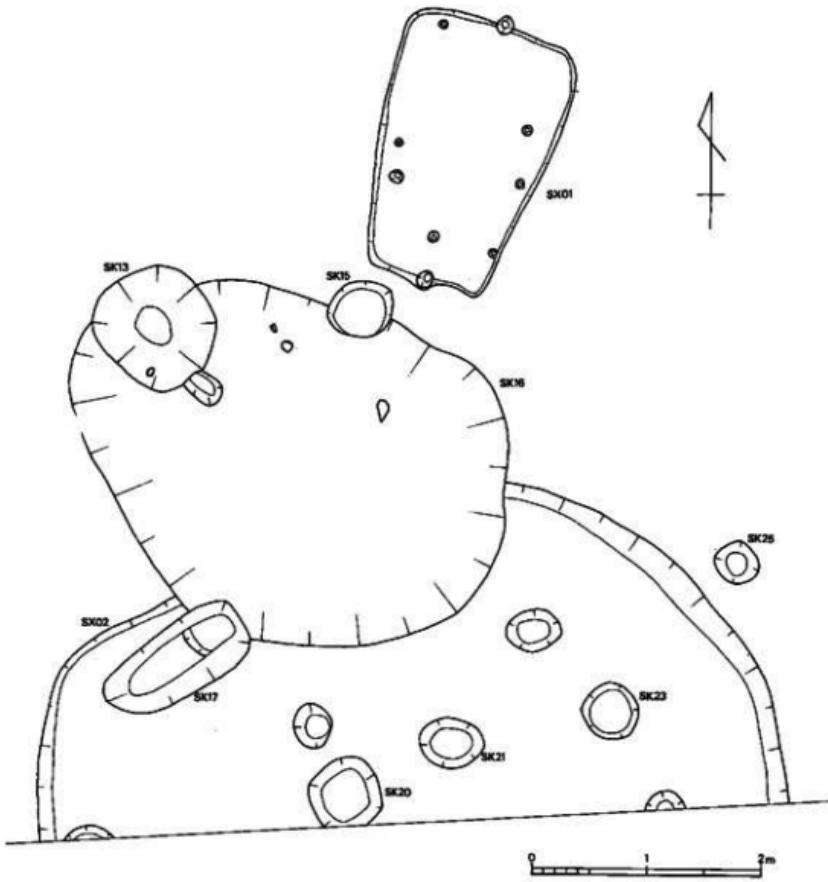
第8図 SD03第2トレンチ土層断面図

褐色砂礫層と同じものと考えられる土層が見られる。一方、SD04の延長線上には暗茶褐色粘質土の厚い堆積が見られ、擾乱されていて全く不明である。なおSD04、SD07出土の遺物はSD03においてはあまり見られない。

以上の溝状造構についてその新旧関係を、切り合い、堆積土、遺物の点から見るならば古い順にSD03→SD07→SD04→SD02、05、06となる。SD08については何等時期決定の資料はもたない。



第9図 SD03第3トレンチ土層断面図



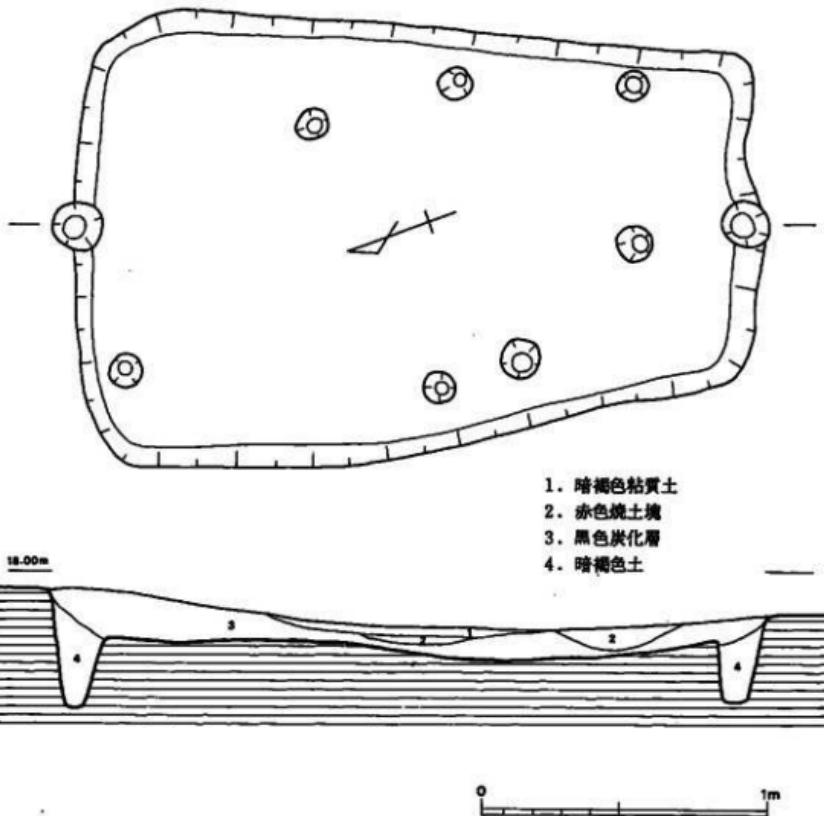
第10図 南調査区南部遺構群実測図

(2) 土壙及びその他の遺構（第10図、図版8）

南区南端の中央付近では多数の土壙や性格不明の遺構が検出された。最大のもの(S X02)は径約6.5mの円形プランを持つもので当初は住居跡かと思われたが発掘の結果ではその確証は得られなかった。ここではS X02など主要なものについて述べる。

S X01 (第11図、図版8)

北辺が広がる長方形のプランを持ち、遺構検出面からの深さ約10cmの浅い土壙であ



第11図 SX01実測図

る。垂直に掘り込まれた壁を持ち、北壁と南壁の中央に一对の柱穴と思われるピットがある。埋没土は炭化物が充満し、赤色に焼けた焼土塊が部分的に存在する。遺物は素焼の土器細片が少量出土したが時期決定は出来ない。同様の規模、形態をとる造構の類例はないがファイヤーピットとも考えられる。

S X02

最大径約6.5mの円形プランを持ち深さ約10cmの浅い土壇である。土壇内の埋土はやや暗い褐粘質土の單一層であるがその埋没土上面からSX02床面まで切込まれた小土壇が8基あり、特にSK17は長方形のプランをもつものである。遺物は土師器、須恵

器の細片がS X02およびその内の小土壠より出土しているが、時期を決定する資料とはならない。S X02は平面形において住居跡程度の規模を持つものであったが、床面に炉跡、柱穴、周溝が確認出来なかつた事と土器その他のある程度まとまつた遺物が出土しなかつた事から住居跡とは考えがたい。

SK16

S X02を切っている皿状の土壠であつて深さは約20cmである。埋没土はS X02より暗い色調の粘質土である。遺物には土壠中央部近くに土師器高坏の破片があるが流入した可能性が強い。

SK13

SK16を切った深さ50cmの土壠である。埋土は黒褐色土で炭化物も多く含んでいる。遺物は土師器及び須恵器の細片で年代が決定できるほどの資料ではない。

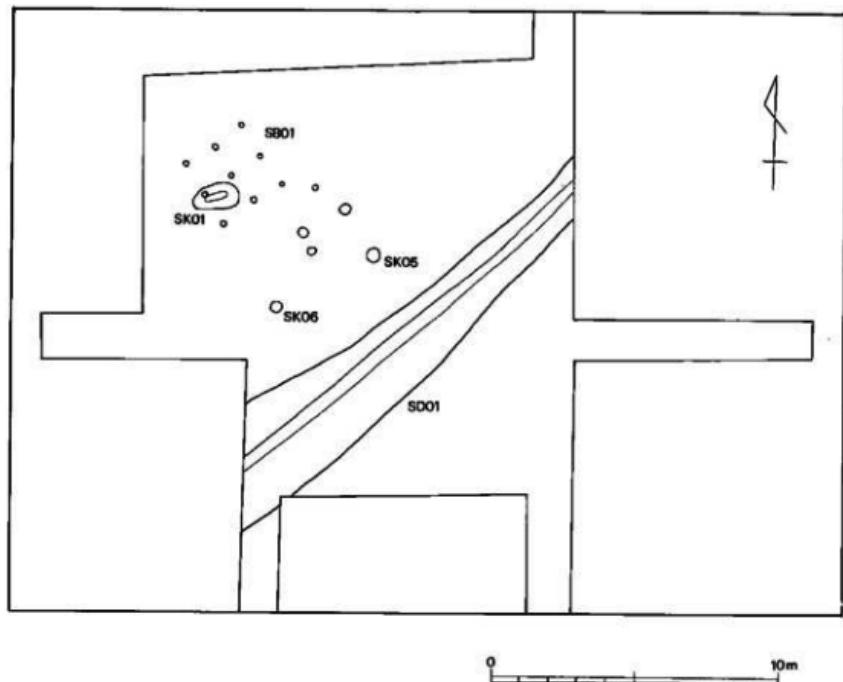
以上の土壠群の新旧関係は主に切り合い関係により古い順にS X02→SK16→SK13→SK14となり、SK17~24はS X02より新しく、SK15はSK16より新しい。SK01は切り合いがなく判断が出来ないが他の土壠より以後のものと考えたい。またこれら土壠群の性格については不明であるが、この部位における水田床土土層以下はかなりの搅乱を受けているらしく遺構の上位レベルも削平されている状態であった。

2. 北調査区(第12図、図版9~11)

溝状遺構1(S D01)と、掘立柱建物1(S B01)、土壠等が検出された。水田床土直下に厚さ約2~5cmの暗褐色植物有機体を多く含んだ粘質土層が広がっており、遺構はその下の明褐色粘質土の上面で検出された。薄く堆積した暗褐色粘質土層からは土師器、須恵器の細片が出土していて、時期はかなり新しい。この土層の性格は旧水田耕作土面の可能性も考えられるが、畦畔その他の遺構は不明であった。

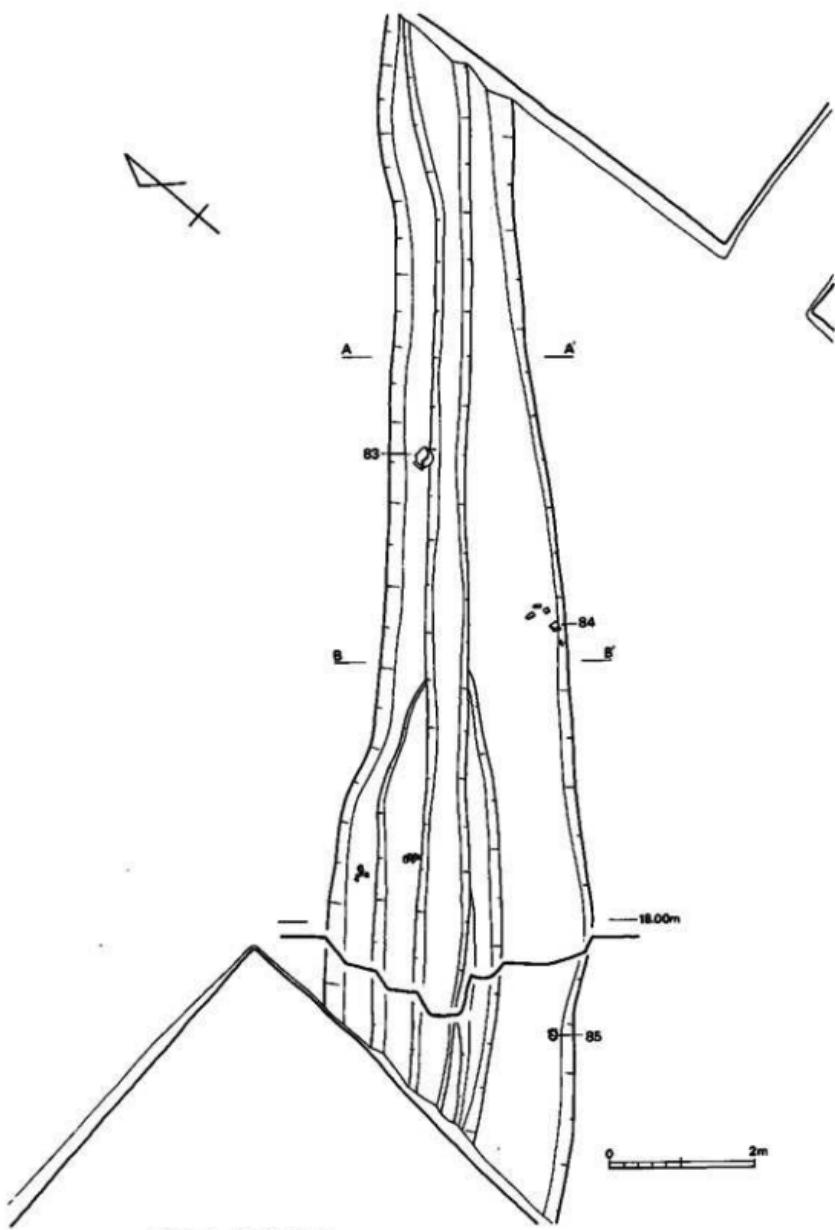
1) SD01

調査区を北東から南東へ走り、幅約2.5mの深い溝の中央に断面が箱状をなす幅約50cmの溝がある。二段掘り的な断面を持つものであるが、土層を観察すると時期を異にする2本以上の溝状遺構が重複している事が明らかである。すなわち箱堀状の二段掘りの形状をとる中央溝が營まれた後、ある程度の堆積のあった時点での東側の幅狭の

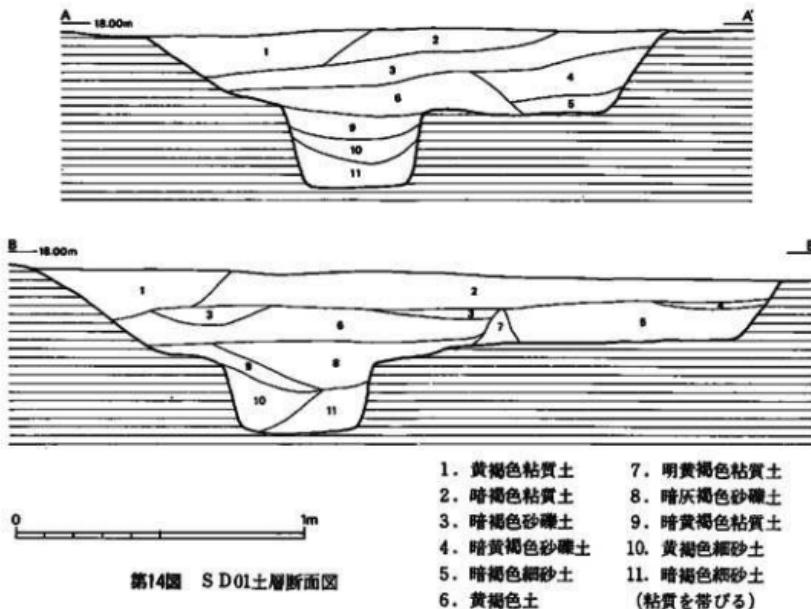


第12図 北調査区遺構配置図

溝が新たに流れたと考えられる。両者の溝とも底位には砂礫層があり流水があった事がわかるが流水方向は底のレベル差から北東から南西へ向っている。この溝の性格はその中央溝の不自然に整えられた断面から考え人為的な用水施設と思われるが、東側のものについても時期的に降るものだけにやはり人為的構造と考えてよいであろう。また西側上位に不自然な堆積を示す土層があるが、流水のあまり考えられない黄褐色土層であり、溝状遺構としての可能性を持つかもしれない。遺物は堆積土中から古式土師器が出土している。したがってこの溝の営まれた時期はこの土器と同一時期あるいはそれより古い時期としてとらえられるが、おそらく古墳時代前期からあまりかけ離れないころであろう。

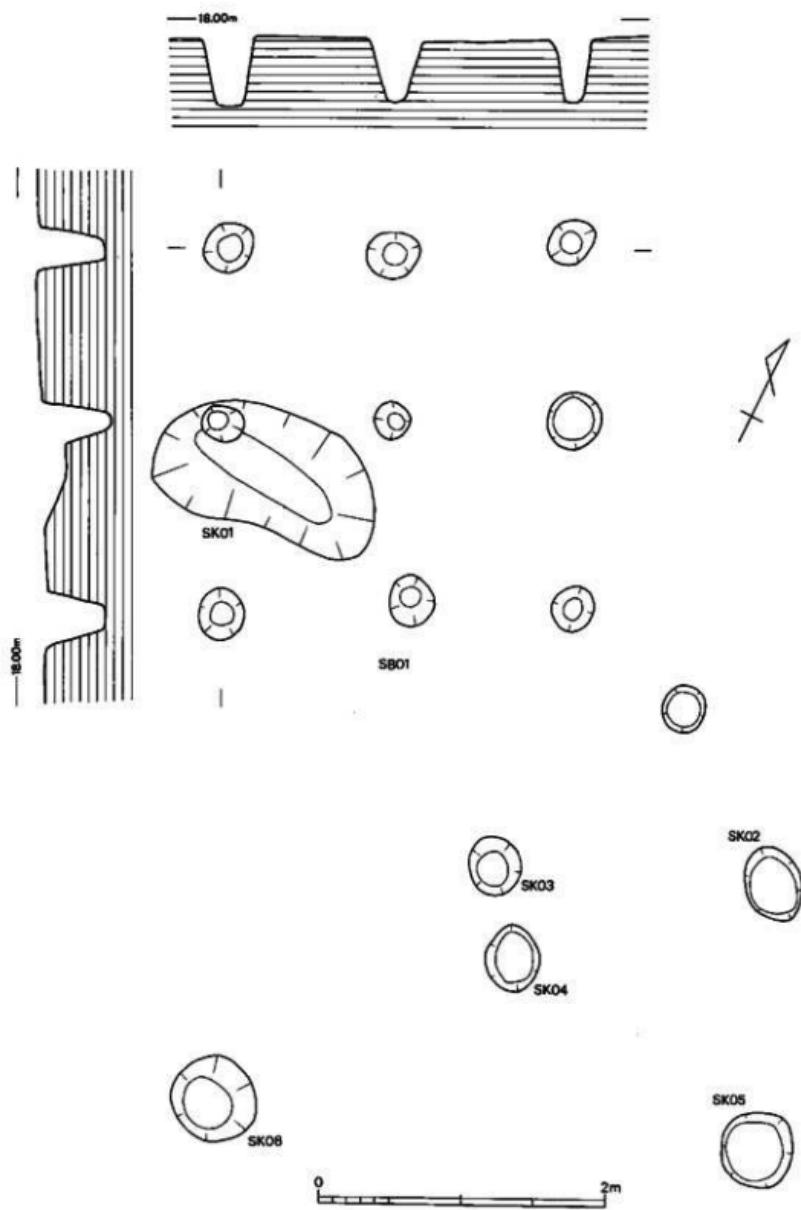


第13圖 S D01実測図



2) SB 01 (第15図、図版11)

SD 01の北側に在り二間×二間の正方形のプランを取るもので一間は約1.25mである。中央にも柱穴が見られ計9本の掘立柱を数える。柱穴内の埋土は暗茶褐色の粘性の強い土であった。SB 01の西側は前述の暗褐色粘質土がやや厚く落ち込んでいくよう堆積しており、あるいは西方にも掘立柱の伸びていた可能性もあるが、調査においては検出できなかった。遺物は柱穴の中から素焼き土器細片が出土しているが年代決定の可能な資料ではない。



第15図 SB01及び土壤群実測図

V 遺 物

1. 土 器

土器は弥生式土器、土師器、須恵器が出土した。しかし多くの土器が流水のあった浅い溝状遺構や、水田耕作土下にあったため、その器表面が摩滅し、細片となっている。また遺物はそれぞれの溝状遺構において、まとまりのある時期の資料が出土するところから、ここでは各遺構の時期の理解のためにも、その遺構毎の出土遺物を順次紹介していくことにする。

(1) SD03出土の土器（第16、17図、図版12）

溝の底から上部にかけて全般に弥生式土器が出土している。時期的には、弥生時代前期末葉から中期及び後期初頭にかかるものであるが、量的には中期のものが多く出土している。

壺形土器（1～6、15、16）

総て逆L字状口縁のもので、口縁部は折り込みや、貼り付けによって形成され、くの字状に屈曲外反した形態のものはない。胴部外面の調整は平行櫛目文を施すもの（1、3）、刷毛目によるもの（15、16）、ヘラ状工具による沈線文が施されるもの（4）、ナデや丁寧なヘラ磨きが施されるもの（2、5、6）があるが、4は古い要素をもつもので弥生時代前期末の遺物といえる。5、6は逆L字状口縁の下に凸帯を一条持つものであるがいずれも口縁端と一体にして貼り付けている。4を除いては弥生時代中期前半の遺物である。

壺形土器（17～23）

外反し下方に拡張した口縁端をもち、口縁端外側に斜格子文を施すもの（17、18、19）、口縁端を拡張し凹線を廻らすもの（20、22、23）、ヘラ磨きにより全面を研摩した口縁部外反のもの（21）がある。17～19はラッパ状に頸部から外反する器形になるものである。22は頸部に貼り付け凸帯を廻らせて肩の張る土器であり胴部内面中位より以下にヘラ削りを施している。

以上の壺形土器はいずれも弥生時代中期の遺物であるが、中期中葉や、やや新しい要素をもつものが多い。

蓋（7）

壺形土器の蓋で天井部に紐かけ穴が一对見られる。紐かけ孔は3個所ないし2個所に穿たれてたと思われるが破片のためあきらかでない。

底部 (8~14, 24~26)

台状の底部をもつもの(8), 風として利用されたと考えられる底部穿孔のもの(9)がある。ヘラ磨きによる外面調整のもの(8, 9, 10, 14, 24, 25, 26), ナデによる外面調整のもの(11, 12)に分けられるが、いずれも弥生中期の土器底部として考えてよいかと思われる。

(2) 第3トレンチ出土の土器 (第18図、図版13)

第3トレンチ付近はSD03, SD04, SD07, が切り合っている部分で、かなり土層の擾乱があり、出土遺物の移動及び流入流出考えられる。そのため正確に出土土器を各溝に関連させる事が不可能である。遺物は弥生時代前期末葉から中期全般にわたるもののが主であり、それに弥生時代後期及び土師器の資料が加わっている。

壺形土器 (27~30)

28, 29はヘラ描き沈線文を胴部外面に施すものであって前期の特徴をもつものであるが、口縁部については折り込み成形(28), 貼り付け(29)で中期の他の遺物との共通性を持っている。27, 30は刷毛調整を胴部外面に行なっており中期の遺物と考えられる。

壺形土器 (31~40)

38, 39, 40は弥生時代後期及び土師器の資料であるが、他は弥生時代中期の遺物である。31~33は、摩滅が著しいため調整法等確實には検証出来ないが、無文の扯張口縁をもつものである。34, 35はラッパ状に開く口縁を持つもので、口縁部外側にヘラ状工具による斜文(34), 斜格子文(35)が施されるが、35は口縁端を下方に扯張していることなど新しい要素を持つものである。36は34の型式の口縁部を持つ土器であろうと思われる。37は無彫壺で、36, 37ともに櫛描き文を施している。38は大型の複合口縁のもので、弥生時代後期後半以後の遺物である。39は長彫壺の器形をとるもので、時期については明確でないが胎土、焼成、調整法から見て古墳時代中期のものと考えられる。40は口径の小さな複合口縁であり、これも調整、胎土から見て古墳時代中期の遺物と考えられる。

(3) SD07出土の土器 (第19, 20図、図版13~15)

溝の南部に集中して土器片が出土し、これらは弥生時代後期後半の土器及び古式土師器の古い様相のものに限定されている。北部においては S D 03との切り合い関係があり、弥生中期から後期にかけての資料が多く、擾乱された状態であると思われる。よってこの S D 07は、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれたものと考える事が出来よう。

壺形土器（45～55）

45, 46の弥生中期の遺物を除き、いずれも弥生時代後期後半から古墳時代前期の古い時期のものである。47, 48は広義の神谷川式土器と考えられ、後期後半の土器である。49は西部瀬戸内を中心に弥生時代後期後半を通じて広く出土している大形の装飾性の強い土器である。50はやや長い頸部と直立し上方に拡張する複合口縁部を持ち、酒津式土器との併行時期が考えられる。51～53は無文化し直立及び外反する複合口縁を有する土器で、古式土師器とみられる。54は各地の前期古墳から出土する壺形土器と器形を同じくするものであって、胎土、焼成、調整共に他の壺形土器とは異なる系列の供獻土器である。55は長頸気味の広口壺となる器形であり、類例は少ないが調整、胎土、焼成及び畿内の出土例と考えあわせ弥生時代後期終末の土器である。

底部（56～58）

56, 57は S D 07北部の S D 03に近い部分で出土したもので、やや古い要素をもつ。いずれも焼成後に底部を穿孔している。58は平底から丸底に移行する時期の土器底部の一つの形を示すものであり、外面の刷毛調整においても弥生式土器から古式土師器にかけての資料として興味深い。

壺形土器（59～70）

59は口縁部が水平に近く外反し口縁部には刷毛目が残り横ナデ技法は徹底していない。胴部内面のヘラ削りは頸部より始まり外面は刷毛による調整である。器壁は薄く胎土、焼成も土師器的な色彩が濃い。60～66, 68は口縁端部をつまみ上げ気味に内傾させている特徴を持つが、65, 66は口縁端部外側に凹線気味に廻る凹みが見られ、外弯気味の口縁部の特徴は他の土器とは異っている。これが60～64, 68との時期差となるかは明らかでない。いずれも口縁部は横ナデ技法が徹底しており龜川上層式や畿内においての出土例との時期的な関連が強く考えられる。67, 69は口縁端に平坦面を横ナデで造り出しているが60～66, 68と調整、胎土、焼成共に共通していく時期差を考

える事は難しい。59を除いては胴部内面のヘラ削りは頸部よりやや下から始まっている。

浅鉢形土器 (71)

浅い胴部に外反した幅広の複合口縁がつくもので、口縁部外側には3条ないし4条の退化した大きな回線が廻り、その上には細か目の刷毛状の痕跡を残している。胎土は緻密ではあるが、焼成が甘く全体にもろい。弥生時代後期の神谷川式の鉢と考えられる。

高坏形土器 (72)

胎土、焼成共に精良な土器であって、透し穴は低く開いた台部に穿たれる。古式土器であろう。

坏形土器 (73)

古式土師器に通有の器形としてとらえられ、胎土、焼成共に精良である。

小型丸底壺 (74)

小さい胴部に大きく開いた口縁部を持ち、本器種の中では最古の器形のひとつであるが、全体に厚ぼったくやや大形であり焼成も悪く、在地で生産された土器であろうか。

以上の様に S D07出土土器の大半は弥生式土器から土師器という限られた時期の資料となるが、小片、細片が多く厳密なセット関係を把える事は危険である。その中であえて細分するならば47、48、49などの壺形土器、71の浅鉢形土器を中心とする弥生時代後期後半の先行するグループ、51、55の壺形土器と59の壺形土器などの前者よりもやや後出的なグループならびに52～54の壺形土器と60～70の壺形土器、高坏形土器(72)、坏形土器(73)、小型丸底壺(74)の古式土師器の古い様相のグループに分けられよう。

(4) S D01出土の土器 (第21図、図版15・16)

S D01は遺構の項において述べたように2本の溝が重複している可能性が強い。遺物も流入が多く单一な内容とはならないが確実に溝中に出土のものは古式土師器として把えられる土器が多い。

口縁部 (75～82)

弥生時代中期の壺形土器の口縁(75～77)、同じく後期の壺形土器の口縁(78, 79),

土師器變形土器の口縁（80～82）に分けられる。

變形土器（83～85）

いずれもやや内湾気味のくの字状口縁を持つもので、口縁端部はわずかに肥厚する。口縁部内外面は横ナデ、胴部内面ヘラ削り、胴部外面刷毛目調整という古式土師器に通有な調整であり、その中でも古い要素を持つものと思われる。出土の時点では底部まで廻る状態であったが、摩滅とその器壁の薄さのため細片となり複元し得なかったが、やや長胴化した丸底であった。

底部（86～89）

摩滅が著しいもので流入遺物と考えられる。變形土器とはまったく時期を異にするものであり、弥生時代中期から後期の土器である。

低脚（90）

浅鉢状の低脚壺の破片と考えられるが、胎土、調整とも丁寧な造りが施されている。

淺鉢形土器（91～93）

いずれも小片であり厳密な時期判定はできない。

高壺形土器（94, 95）

94は壺口縁がやや小さい形状のものであり、S D01上面において出土した。外面には刷毛目が縱方向に残っている。95は前者より大型の壺部で、口縁へのひろがりは直線的といえる。

壺形土器（96, 97）

口縁が浅く広くひろがるもの（96）と平底から45°に立ち上る口縁部をもつもの（97）の2者であるが、96が先出的なものであろう。

S D01出土の土器は83～85の變形土器と同一の時期と考えられる土器片が多く、この溝の営なまれた時期を古墳時代前期に限定して良きようである。

(5) S D04出土の土器（第22, 23, 24, 25図、図版16～20）

土師器、須恵器の破片が多量に出土している。完形に近い土器も多く、県内では断片的にしか知られていない時期のセットとして、重要な資料である。ただS D06に切られている部分も多くわずかに遺物の攪乱、流入のある事は否めない。

土師器

變形土器（98～105）

口縁端部内面に四角く偏平に肥厚が見られるもの（98～100, 102），口縁端部内側に平坦面をやや幅広に造り出しているもの（101, 103）があり，肥厚が退化した形か，別の要素によるものかは不明である。104は丸く単純な口縁端部をもち胴部外面にヘラ磨きが施されるという特徴もあり他の變形土器に比して異なった様相の土器である。98は口径17.5cm，高さ29.5cm，胴部最大径26.5cmでやや長胴化しており他の土器もほぼこの時期のものと考えられる。調整法では99を除いては胴部内面をヘラ削りした後指頭でなでつけるという特徴がある。98もヘラ削りの後を薄くナデているようにみえる。

高坏形土器（106～118）

106, 107, 110は口径15cm，器高12cm前後でいづれも口縁部が外曲した深い坏部と短かめの脚部をもつ特徴を示している。透し穴はすべて脚柱部に穿たれている。111, 112, を除いては脚柱部内面の坏底部との接合点は，粘土が落ち込みを見せていない。充填が行なわれた痕跡も希薄である。112は坏底部と坏口縁との接合部を滑らかに丸くナデており，外面には全く接線を形成しない。

坏形土器（119, 120）

119は口縁部を内滴気味に立ち上らせ口縁端部内側に平坦面をつくるようにつまみ上げ気味に調整している。120は手づくねで形成した上をナデで仕上げているため器表に凹凸が残っている。

手づくね土器（121～124）

いづれも胎土は緻密であるが焼成が甘くもろい。121, 122, は口径5cm, 高さ6cm前後で口縁部をつまみ上げて造り出しており，増の器形のニュアンスを示すものであろう。

彫形土器（125, 126）

125は輪積み痕が内面に明瞭に残っている。把手のつけられた胴部破片で，類例が少ないため全体の形を把握できないが，彫形土器となるのであろう。把手は多数出土しているが，126はその中のひとつで指頭圧痕による整形である。

須恵器

大甕（127）

下胴部の破片で胎土は精選されていて，外面は薄く自然釉がかかった様に黒く光沢

がある。内面は約3cmの板状工具で平滑にナデている。下位に「V」の字様のヘラ記号がある。

坏蓋 (129)

口径12.5cm、高さ4cmで体部が天井部から明瞭に屈曲して下方に伸びる。身受け部は平坦面を造り出している。

坏身 (128, 130)

いづれも立ち上りは共に直立し長い特徴を示し、128は口径12cm、高さ5cmをはかり口縁部に平坦面をつくる。130は口径10.5cmで口縁端部を尖らしている。130は坏蓋129と胎土、焼成が酷似していてセットとなるかもしれない。

壺口縁 (131)

口径16cmで口縁と頸部に凸帯をめぐらし、あいだに横目文様のある精巧なつくりであり、大壺 (127)と同一の時期と考えられる。

蓋 (132)

口径10.5cmをはかる。あまり類例の無いもので精良なつくりであり、身受け部の特徴は129に共通した古式の特徴を示している。透し穴の位置および内面の状態から考えてここでは蓋としたが、逆転の可能性もある。

つまみ (133)

首部が長く立ち上るもので、胎土、調整から見て古式須恵器坏蓋などにみられるつまみであろう。

椀 (134)

小さく外反した口縁部下に凹線気味に段をつくり出すもので、胎土、調整から見て他の須恵器と同一の時期が考えられる。

鰐 (135)

やや扁平な胴部の破片で、中央に羽状の横描き列点文を施す。この装飾文様は132にも見られる他、SD04出土の須恵器破片に多く見られる。

用途不明品 (136)

外面に平行叩きのある大壺の破片を長方形に面取りしている。転用碗としての痕跡は無く、用途は不明である。

以上の中でSD04出土の土師器は變形土器の器形からみると、畿内における布留式土器のうち新しい編年位置にあるものと共通の様相を持つと考えられる。またこれら

土師器の時期の細分は当然考えねばならぬが、一応須恵器を伴出しへはじめる時期のものと、それから一型式変化の見られるものが含まれていると考える。

(6) S D 06出土の須恵器（第25図、図版20）

S D 05と同一の内容のものを出土している。土師器及び須恵器の破片であるが特にS D 05には見るものではなく、また土師器はまったく細片と化しておりここではS D 06出土の須恵器についてのみ述べる。

甕口縁（137～139）

いずれも口縁端内側に肥厚をもつが、138、139は口縁端外側も幅広く肥厚させる。胎土つくりとも粗雑である。

坏身（140～143）

140、141は立ち上りが短く内傾していて、つくりはかなり良好である。142は底部に粘土の巻き上げ痕がそのまま残っており、143は短かい高台がつく。142、143共につくりは粗雑である。

以上の様にS D 06は須恵器でも新しい様相のものが多い。土師器も細片ながらS D 04出土のものより後出の特徴を持つものであり、古墳時代後期以降のものと考えられる。

2. 石 器（第26、27図、図版21）

砥石、磨製石斧、磨製石包丁、石錘、石錐、石鎌、石槍が出土している。出土状態は多くのものが水田床土下であり、遺構とは直接の関連がない。その中で砥石1、石錘2、石鎌1、石包丁がS D 07及びS D 04、S D 03との関連を持つものと思われる。

砥石（201、202）

大型の据えつけて使用するもの（201）が一点、S D 07から出土している。砂岩製で荒砥としての用法がその擦痕から考えられた。折損しているが、小型の手に持つて使用するもの（202）がS D 04上部から出土しているが、流入遺物と考えられる。2面において使用痕が見られる。使用面はかなり緻密で上砥として用いられた可能性がある。

磨製石斧（203、204）

いずれも半分以上折損しており、床土直下から出土している。203、204共に、S D 03付近から出土しており、形態的に見ても弥生時代の遺物であろう。

石錘（205、206）

S D 04中から出土している。205はほぼ円形の安山岩の中央を繩懸りの凹みが廻っ

ている。206は長軸方向に繩懸りをわずかに両先端に残している。

石鎌 (207~219)

未製品 (207, 210) を含め13点出土した。総て打製で平基式及び無基式である。このうち216, 217, 218がSD07中から出土しているが、浅い溝状遺構であるだけに、移動流入の可能性も強い。未製品における調整痕や他の石鎌の断面から考えて、扁平なフレークを細かな押圧剥離のみの調整で成形していったと考えられる。また一方の面の一側面のみをていねいに押圧剥離し、他の面は粗雑な調整痕をのみ施しているため、断面が偏った菱形になるものが多い (207, 208, 209, 212, 214, 216, 217, 219)。

石鎌 (220~222)

錐部の一端に大きなつまみをつけたもので、つまみが両側面に広がるもの (222) と、一方に広がるもの (220, 221) に分けられる。片側にふくらんだものは一次調整時の剥離面を一方の面に丸味をもって生かしたものであって、右きき、左ききの両者のいずれに有効なものであるかは明確ではない。

石包丁 (223~225)

いずれも磨製で粘版岩を用いている。SD07から一点出土しているが、流入遺物の可能性が強い。

石核 (226)

安山岩で、節理に沿って四面をはいでフレークを造る。全体に強くカーブしており、大きなフレークを取ることは無理で、石鎌などの石核と考えられる。

石槍 (227)

SD03から出土している。安山岩製で、横剥ぎのフレークを全体に粗雑な押圧剥離によって調整する。特徴として一次調整のフレークのネガティブな面により丁寧な調整を加え、ポジティブな面は粗雑な調整のみで、一部は打撃のみという個所もある。そのため、全体として長軸方向がしなった断面をもつたままの形となっている事があげられる。また下方が欠損している可能性が強い。

3. 瓦

水田床土直下、遺構検出面上に、調査区域全面にわたり布目瓦片が31点出土している。これらの瓦は、備後国分寺との関連を考えさせるが、従来から御領平野一帯において出土している。

第1表 石器計測表

番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	備考	出土地点
201	砥石	12.5	12.3	942.0	砂岩		S D 07
202	*	(3.3)	5.0	(722)	*		S D 04
203	石斧	(8.4)	(1.6)	(37.2)	ホルンフェルス	磨製	床土下
204	*	(3.5)	7.8	(236.4)	細粒閃綠岩	*	*
205	石錐	5.6	6.2	283.4	安山岩		S D 04
206	*	7.8	5.5	254.3	閃雲花崗岩		*
207	石鐵	1.9	1.6	1.0	安山岩	打製・未製品	床土下
208	*	1.6	1.2	0.4	*	打製	*
209	*	(1.4)	1.2	(0.7)	*	*	*
210	*	2.6	1.4	1.3	*	打製・未製品	*
211	*	2.0	1.2	1.0	*	打製	*
212	*	2.6	1.1	(1.3)	*	*	*
213	*	2.5	1.9	1.8	*	*	*
214	*	(1.4)	1.0	(0.3)	*	*	*
215	*	1.9	1.2	0.6	*	*	*
216	*	1.8	1.6	0.9	*	*	S D 07
217	*	(1.8)	1.2	(0.7)	*	*	*
218	*	(1.9)	1.6	(1.1)	*	*	*
219	*	(2.5)	1.8	(2.5)	*	*	床土下
220	石錐	(4.8)	2.0	(5.3)	*	*	*
221	*	(4.2)	2.3	(6.1)	*	*	*
222	*	(2.6)	1.7	(1.0)	*	*	*
223	石包丁	(3.8)	3.7	(13.3)	粘板岩	磨製	*
224	*	(5.7)	4.2	(22.4)	*	*	S D 07
225	*	(2.5)	5.5	(7.5)	*	*	床土下
226	石核	6.0	3.6	142.7	安山岩		S D 07
227	石槍	(5.0)	2.0	(7.9)	*	打製	S D 03

() は現存値

VI まとめ

1. 造構について

今回の発掘調査によって検出された溝状造構は S D07 と S D08 を除き高屋川に沿った方向、すなわち北東から南西へ流れる流水のあった造構であって、S D03 はその規模から見て河川であったと思われるが、S D01, 02, 04, 05, 06 は自然地形による流水方向を生かした用水路的性格のものであったと考えられる。特に S D01 は、人為的な開削が行なわれたとしか考えられない断面形を示している。S D04 は、かなり多量の土師器高壙や、手づくね土器、古い形式の須恵器が出土していて、祭祀との関連を考えさせる。S D02 及び、S D05, 06 にしてもその規模がほぼ一定な事は条里とは異なる方向ながら、注意したい要素である。

S D07 については、自然地形の傾斜に逆方向の流水のあったと思われる点と、その方向の特異性、南部における限られた時期の土器の集中した出土状態などを考え合わせると、南調査区南方のほど遠くない所に集落跡が存在した可能性が強く、S D07 と、S D08 はその集落跡にとって何らかの取排水機能を果たしたものと考えられる。

掘立柱建物址の S B01 については、以前調査された北調査区の北方の近世造構群との関連が考えられるが、⁽¹⁾ 確証はない。

各造構の新旧関係については造物、土層、切り合い関係などから古い順に S D03 → S D07 → S D01 → S D04 → S D02, 05, 06 → S B01 と推定しておきたい。

2. 土器について

今回の調査では、弥生時代前期から古墳時代後期に至るまで時期的に継続した資料が出土しているが、特に S D07, 01, 04 からは従来広島県下では資料の少なかった古式土師器及び、須恵器を伴出しあはじめる時期の土師器が不完全ながらもセットに近い形で出土した。ここではそれらの土器についてまとめて見たい。

S D07 出土の土器は、弥生式土器から土師器への移行期の土器編年において重要な資料と言える。しかしながら、どの土器をもって弥生式土器とし、土師器とするかは未だ明確な結論が出ているとは言えず、S D07 出土の土器についても、いずれの土器を弥生式土器とし、土師器とするかは差し控えたい。そこでここでは他地方の土器型式との併行関係について見る事にとどめる。

畿内の第V様式の土器の新相と併行するものに49の大形壺があげられる。49はSD07の北部に近い部位で出土し、南部の集中した出土地点からは離れている。47、48もやはり離れた地点から出土したものだが、器壁の薄手な事、精巧さから49と同様の編年位置を与える。畿内の庄内式土器や、岡山県の酒津式土器に併行すると考えられるものに50、55、58、59、65、66があげられ、やはりその二型式の中でも新相の土器(2)に併行すると思われる。51~54、60~64、67~74は畿内の布留I式土器に併行するものであるが、60~64、68の変形土器の口縁端部の特徴は、岡山県上東遺跡、愛媛県古照遺跡、大阪府船橋遺跡、東弓削遺跡などの出土例と類似している。特に船橋例は庄内式土器と布留式土器の中間的要素を持つものであり、他の出土例も布留I式土器中の古相のものに併行すると考えられ、SD07出土のものも技法、器形から見て、やはり布留I式土器の古相のものに併行すると考えたい。67、69、70のような特に口縁端部に特徴をもたないものも同様の時期であろう。71、74のような技法、器形に布留式土器の影響を受けながらも在地での生産を推定できる土器がセット中に含まれる事も、古く考えられる要素としてあげられるのではないかと考えられる。

SD01出土の変形土器は、布留I式土器に併行するものであるが、SD07出土のものよりは新しく、口縁端部が内面肥厚し、器形、調整にも布留式土器の強い影響が見られ、地方色は一掃されている。

SD04出土の土器は古式の須恵器を伴出する時期のもので、SD01出土の土器からは1型式程隔り、布留III式土器に併行するものである。ただ多少の混入があり、古相のものと、やや新相のものに分けられるかもしれない。SD04出土の変形土器の特徴として、胴部内面に指頭によるナデ、ナデつけ、押圧が施されたものが、ヘラ削りされたままのものより多く認められる事があり、104のように胴部外面をヘラ磨きするという特異な例もあり、在地の生産系統の存在が考えられる。

SD07出土の土器は摩滅が著しいものが多く、それをもって広島県東部沿岸地域の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年を考える事は危険であり、ここでは横見廐寺遺跡出土の土器の整理を待つ必要がある。SD01出土土器と、SD04出土(8)土器との間には型式的に間隙があり、その間にに入る資料として大田貝塚出土の土器、(9)ザブ遺跡出土の土器があげられる。

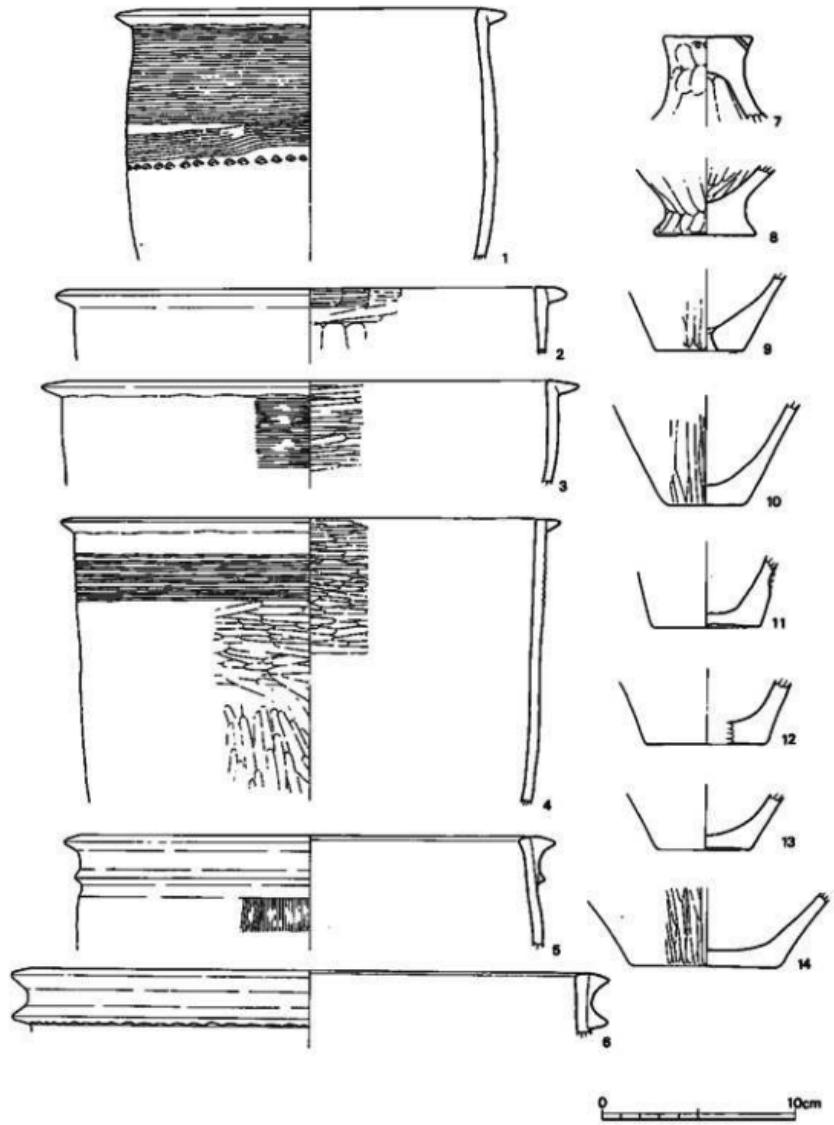
- 註 (1) 広島県教育委員会『神辺御領遺跡第2次発掘調査概報』 1978年
- (2) 庄内式、酒津式を二型式にわける場合の新しい方の型式という意味である。
- (3) 布留式土器については現在かなりの細分化が行なわれているが、ここでは、須恵器伴出期のものをⅢ式とし、それ以前を二型式に分ける三型式分類を用いた。
- (4) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第Ⅱ集 1974年
- (5) 松山市教育委員会『古照遺跡』 1974年
- (6) 大阪文化財センター「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡発掘調査報告書」 1976年
- (7) 八尾市教育委員会『東弓削遺跡』 1976年
- (8) 広島県教育委員会『安芸横見廐寺の調査』Ⅱ, Ⅲ 1973, 1974年
- (9) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- (10) 広島県教育委員会『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 1973年

第2表 各溝出土土器の消長

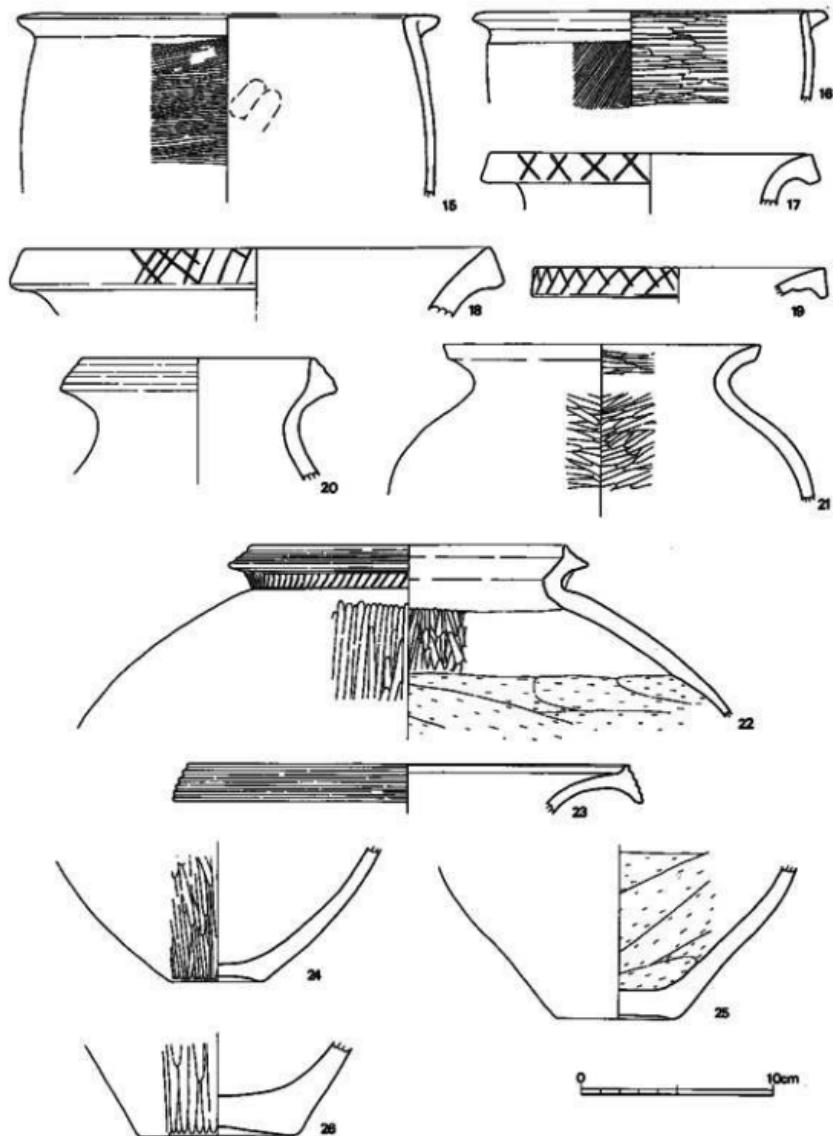
	弥生時代			古墳時代		
	前期	中期	後期	前期	中期	後期
S D03	—	—	—			
S D07			—	—		
S D01				—		
S D04					—	—
S D02						—
S D05						—
S D06						—

註 1. S D01出土土器は純粹に溝中より出土のもの

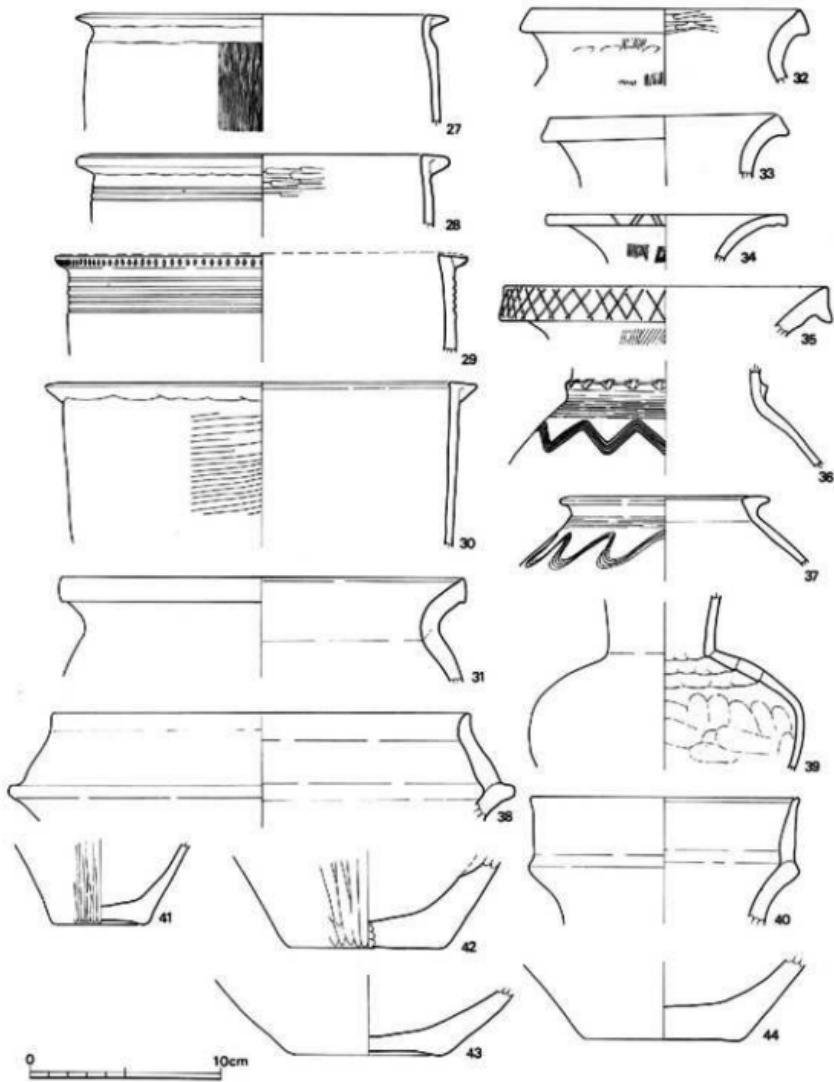
2. 古墳時代前期はA. D. 400年前後まで、中期はA. D. 500年前後まで、後期はそれ以降とする。



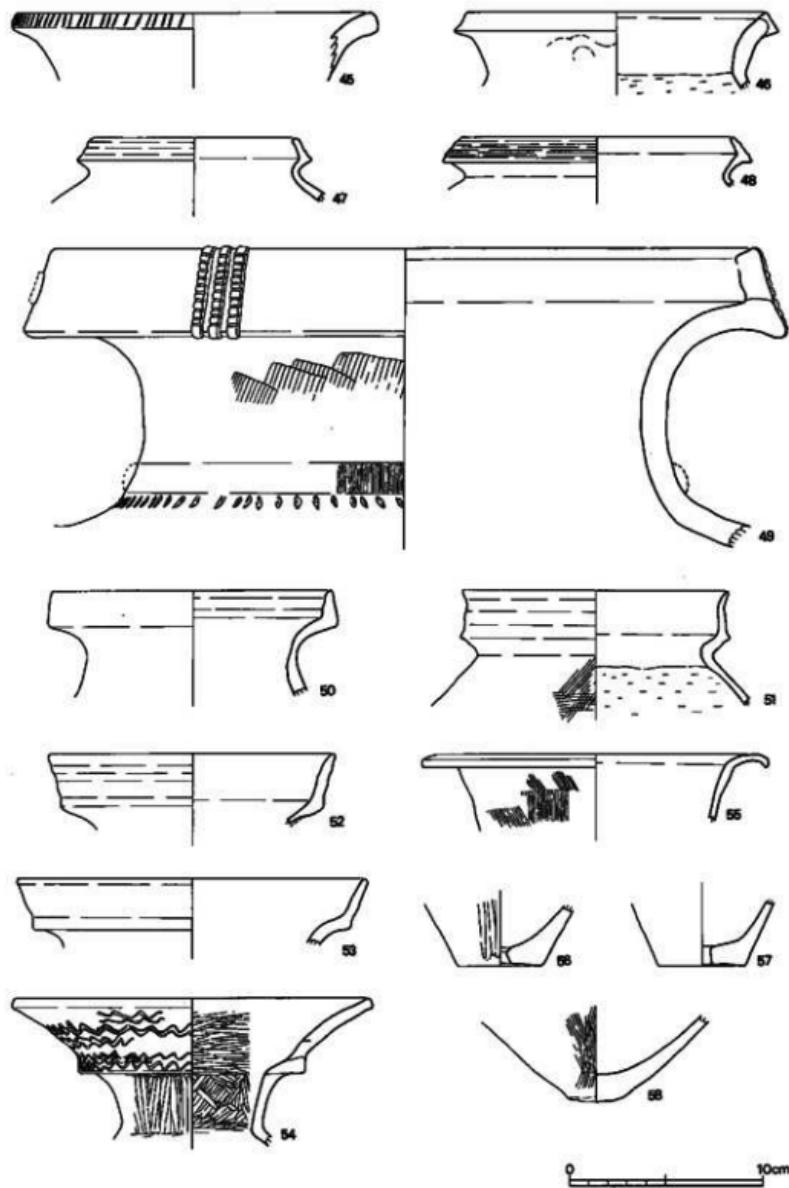
第16圖 SD03出土土器実測図（1）



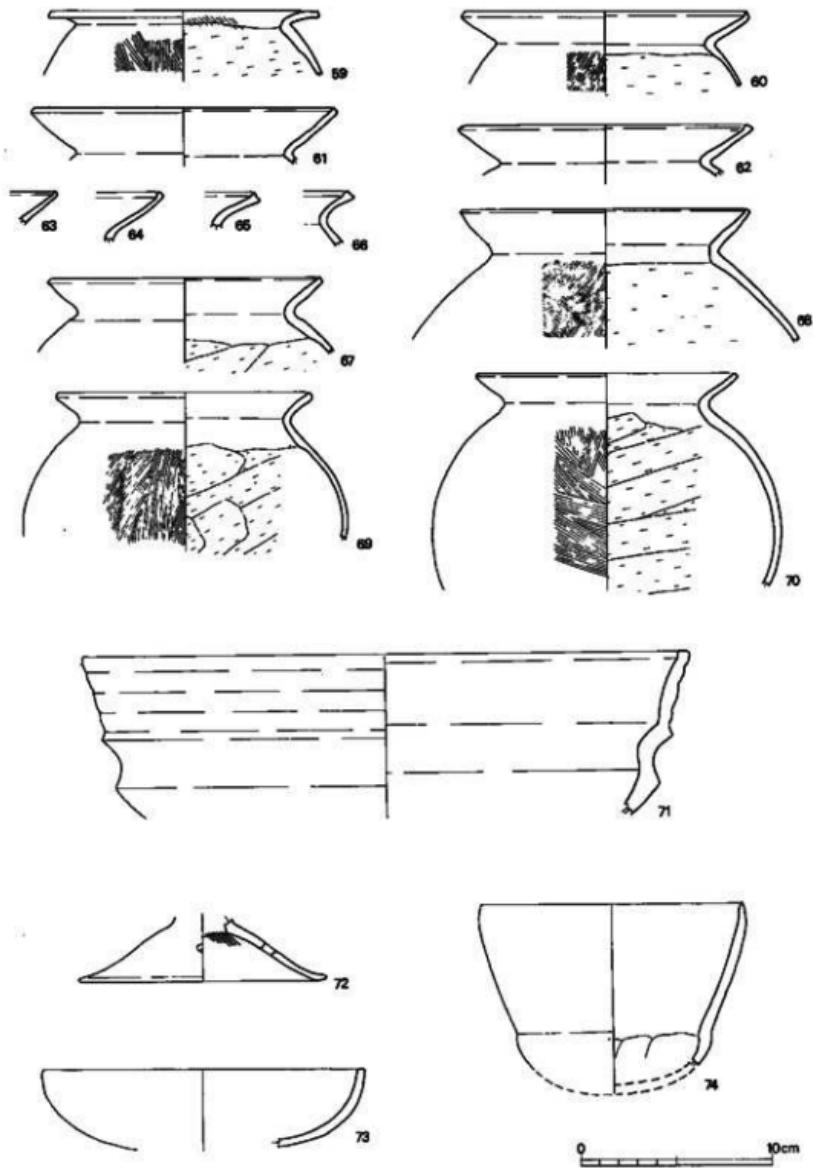
第17圖 S D03出土土器実測図(2)



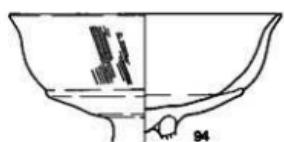
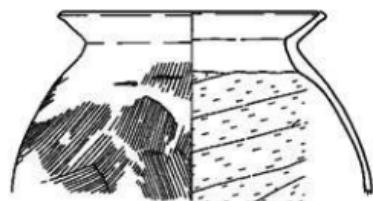
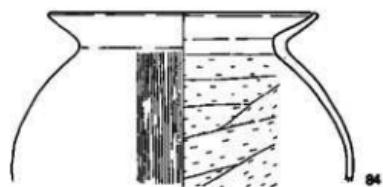
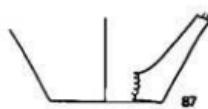
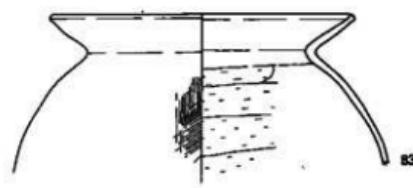
第18図 第3トレンチ出土土器実測図



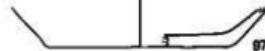
第19図 S D07出土土器実測図（1）



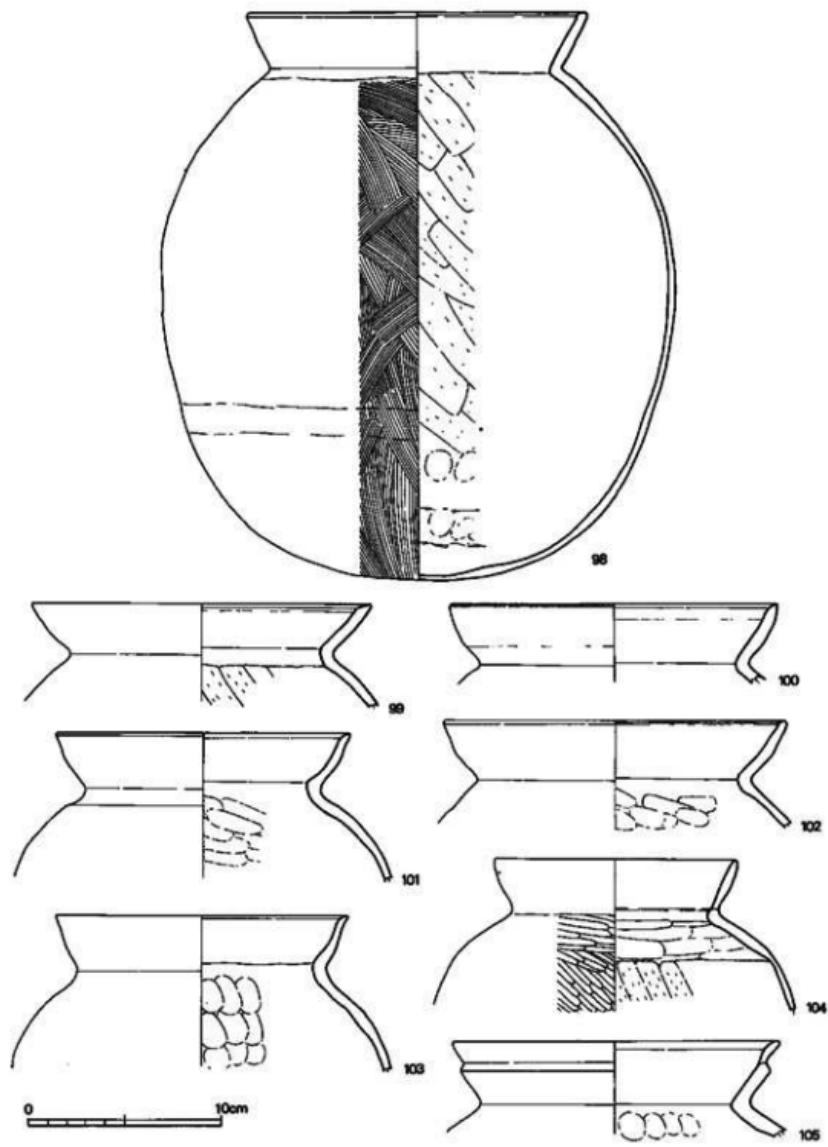
第20図 SD 07出土土器実測図（2）



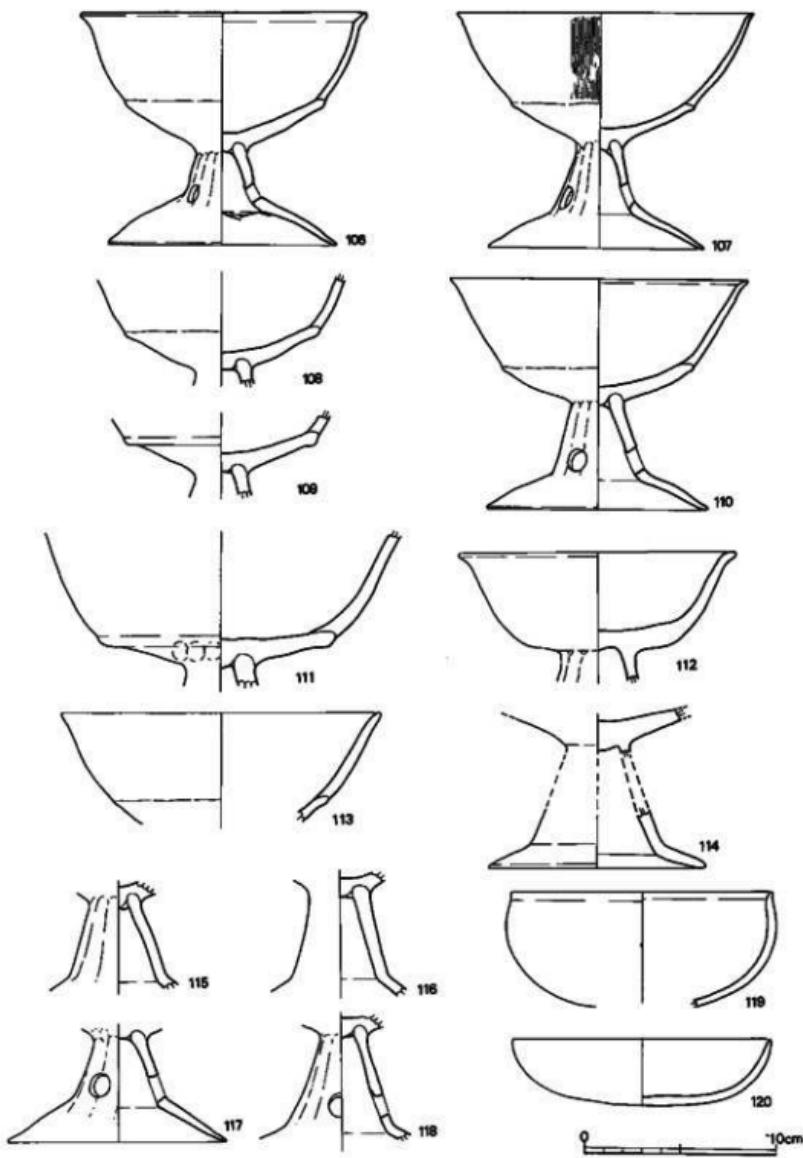
0 10cm



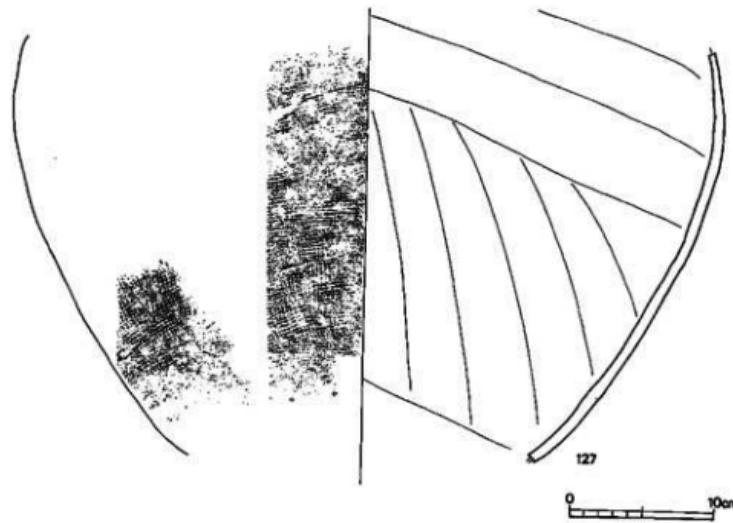
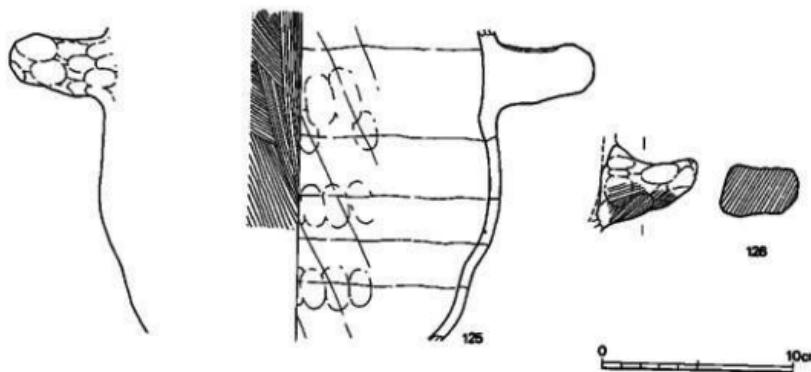
第21圖 SD 01出土土器実測図



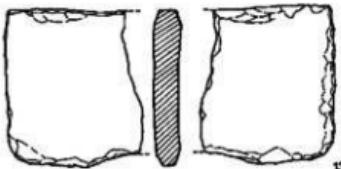
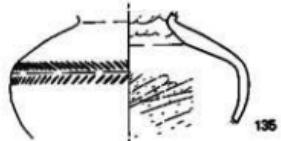
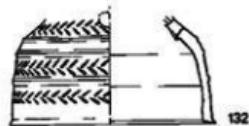
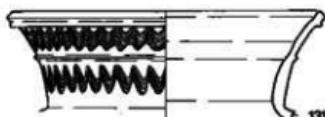
第22圖 SD 04出土土器実測図（1）



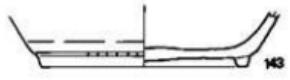
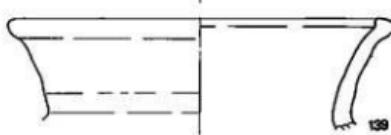
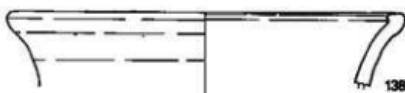
第23図 SD04出土土器実測図（2）



第24圖 S D04出土土器（上），須惠器（下）実測図（3）

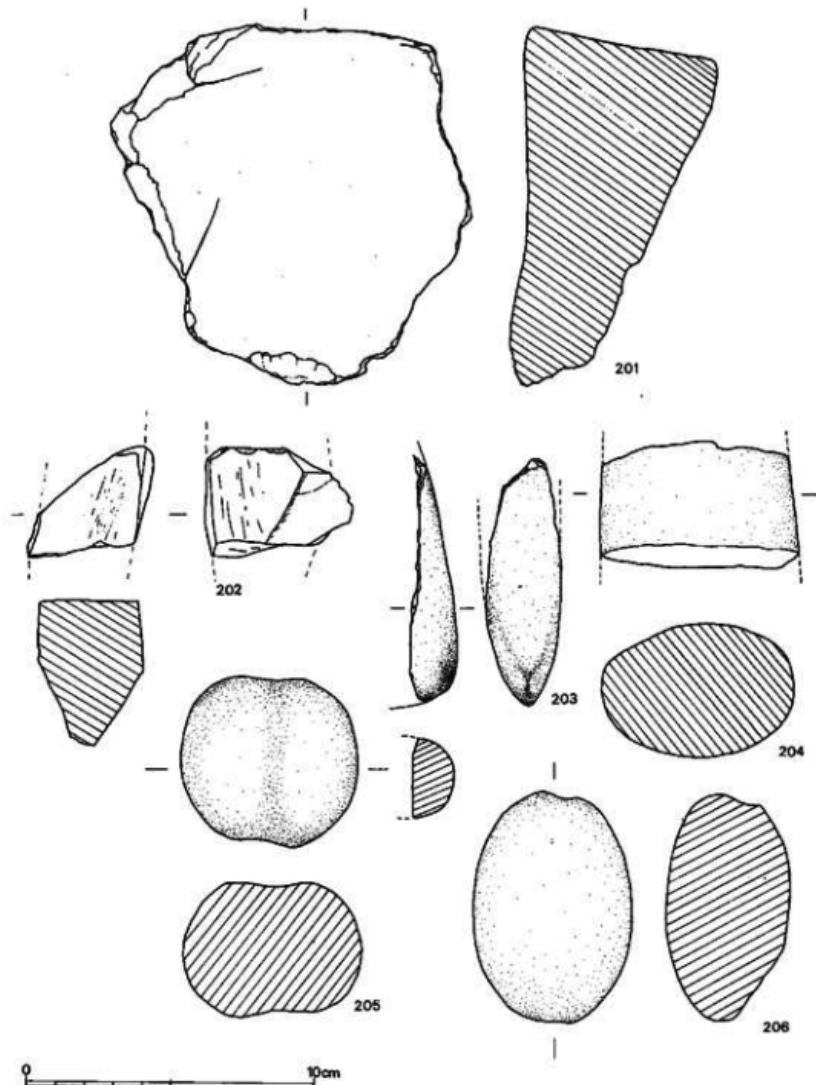


0 10cm

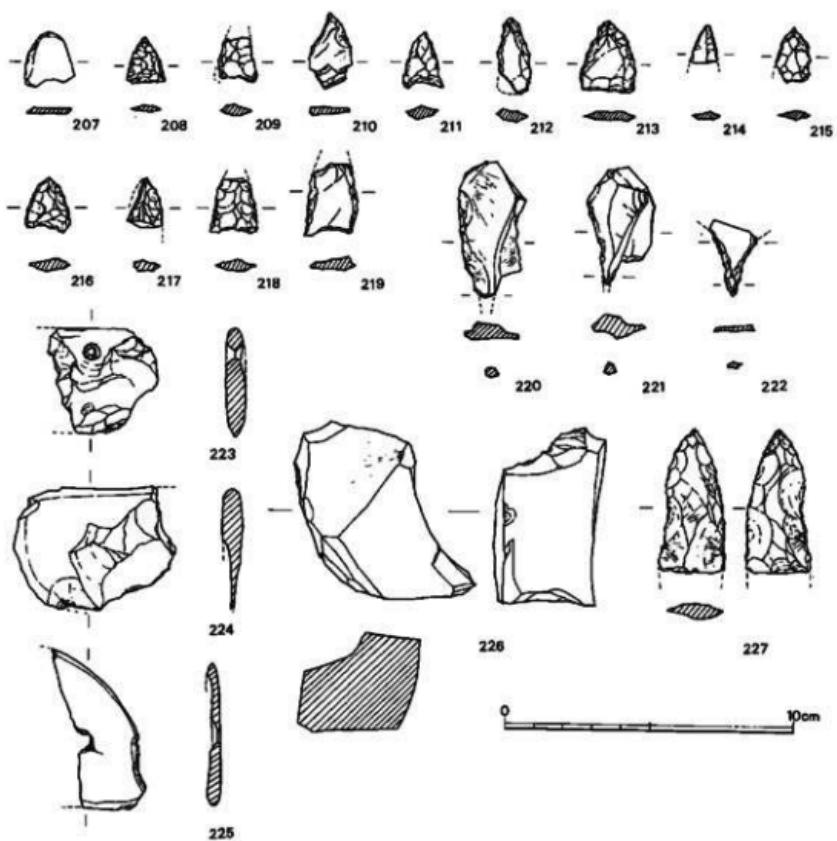


0 10cm

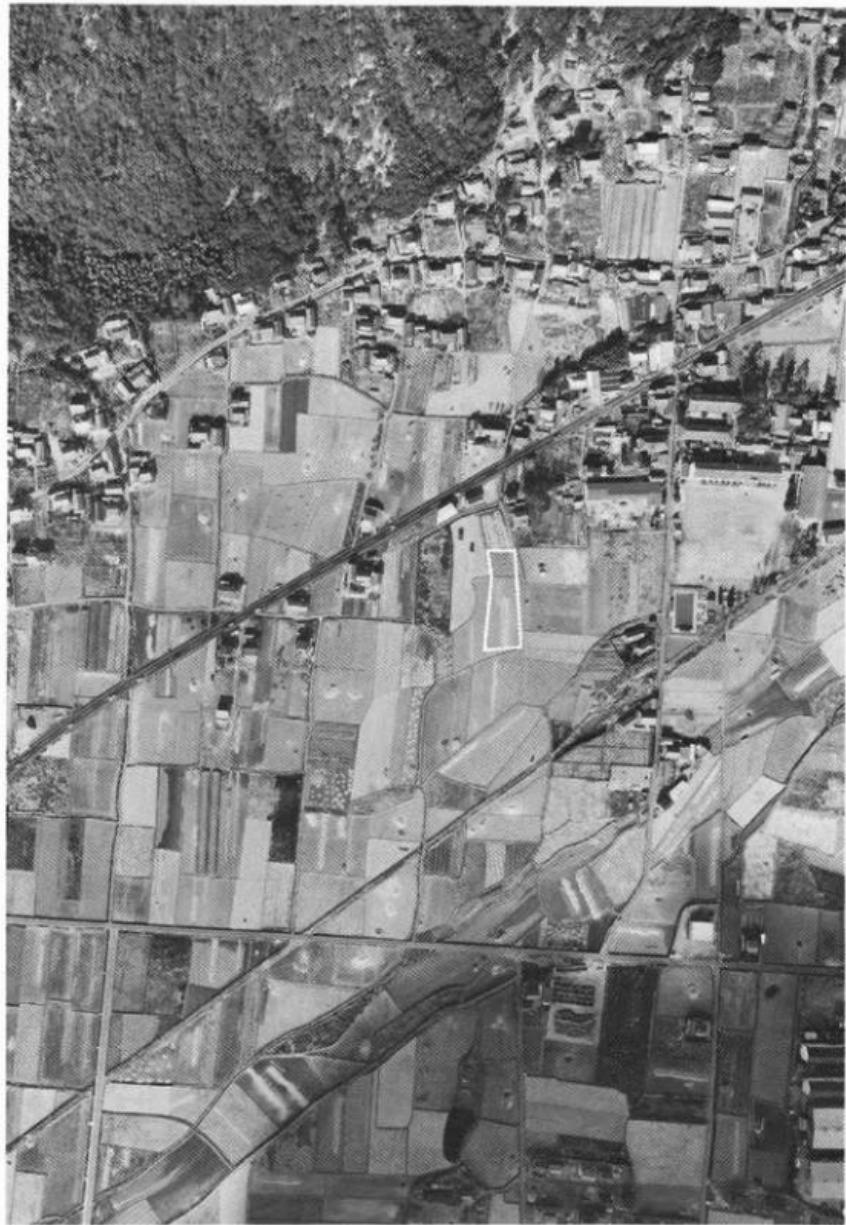
第25図 SD04〔上〕、SD06〔下〕出土須恵器実測図



第26図 石器実測図 (1)



第27図 石器実測図(2)



御領跡周辺航空写真



a 御領遺跡遠景（北より）



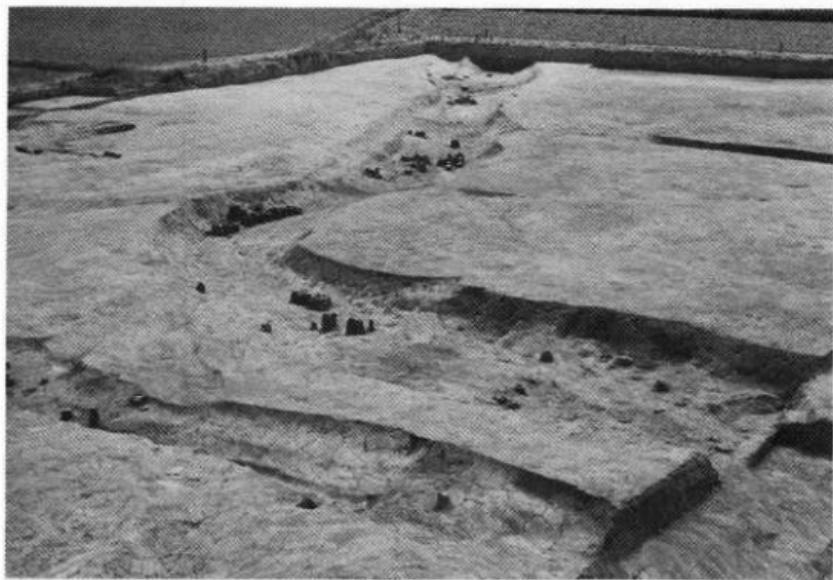
b 調査地全景（南より）



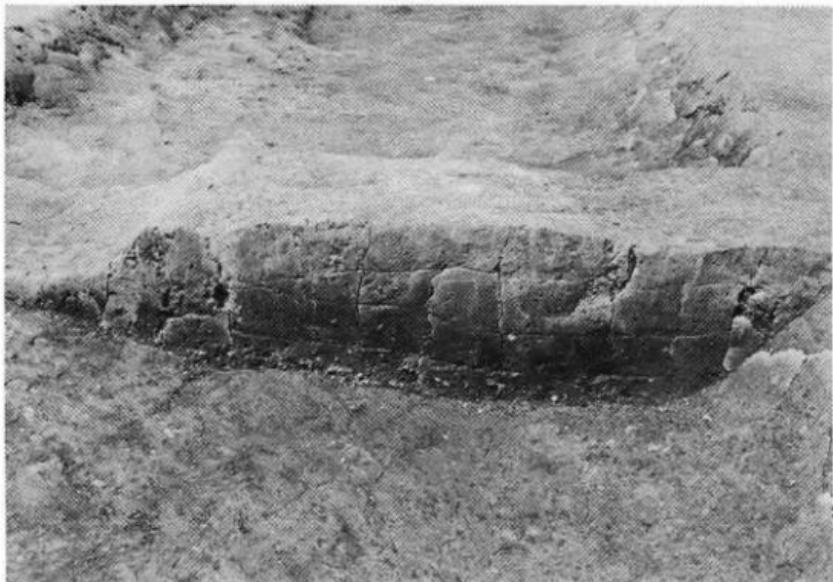
a SD02全景（南より）



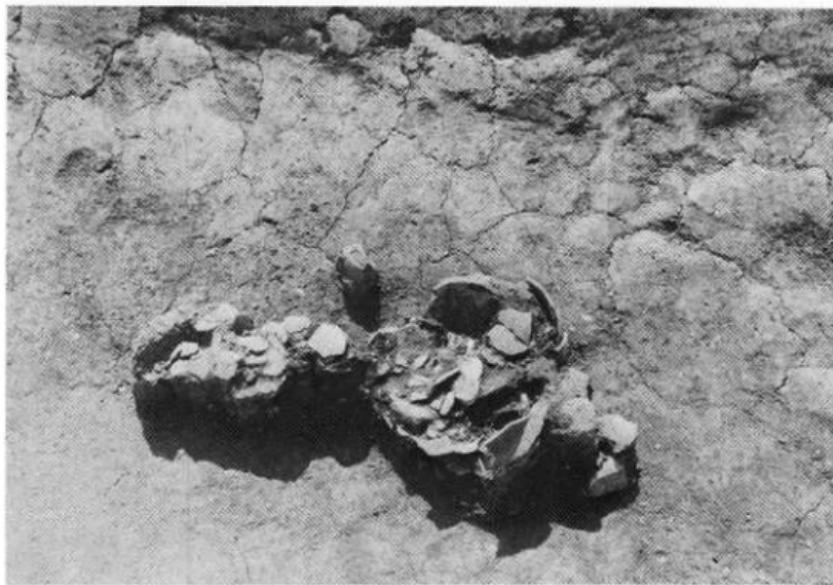
b SD06全景（東より）



a S D 04全景（東より）



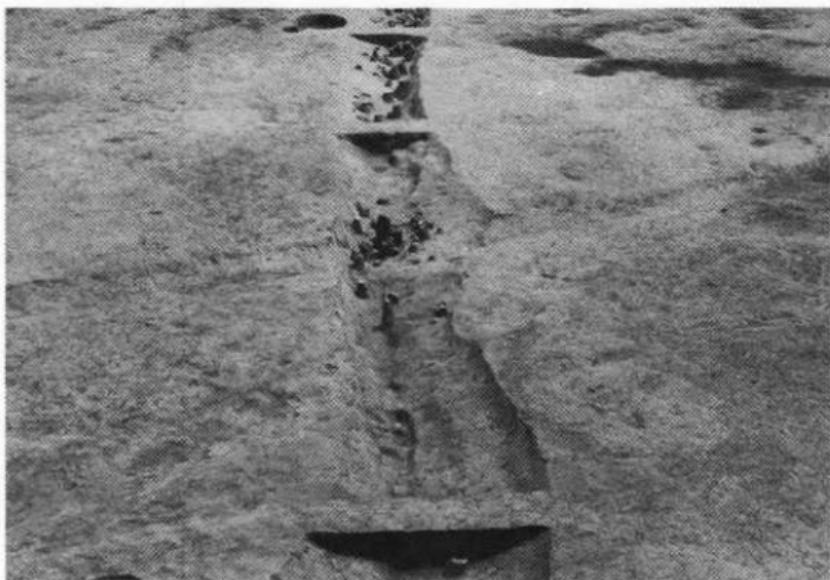
b S D 04断面



a S D04土器出土状態



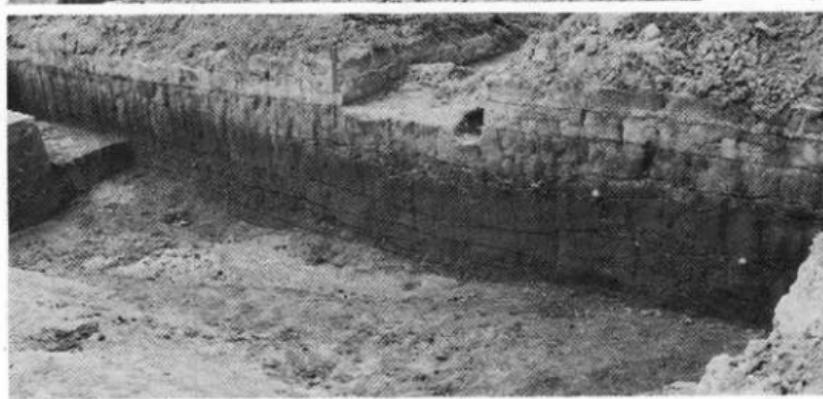
b 同 上

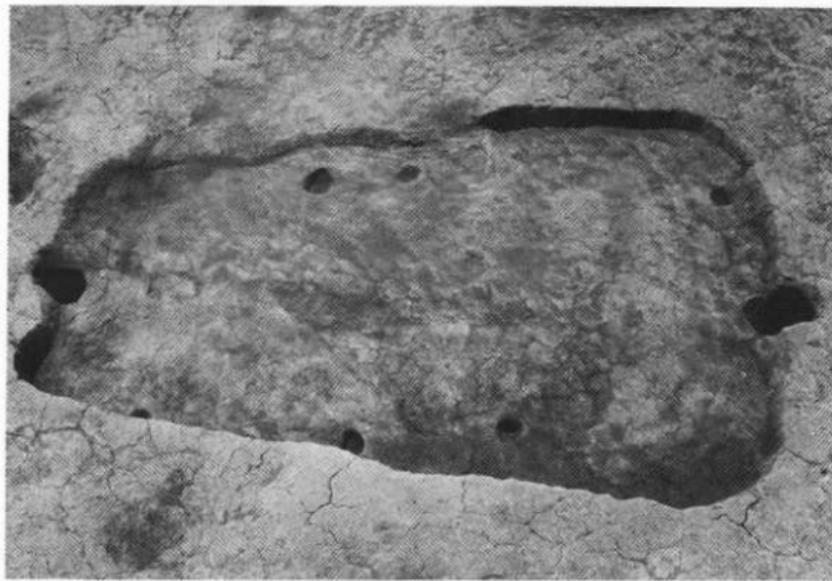


a SD07全景（北より）



b 同 上





a SX01全景（東より）



b 南調査区南部遺構群全景（北東より）



a 南調査区調査後の状態（東より）



b 北調査区遺構検出前の状態（北より）



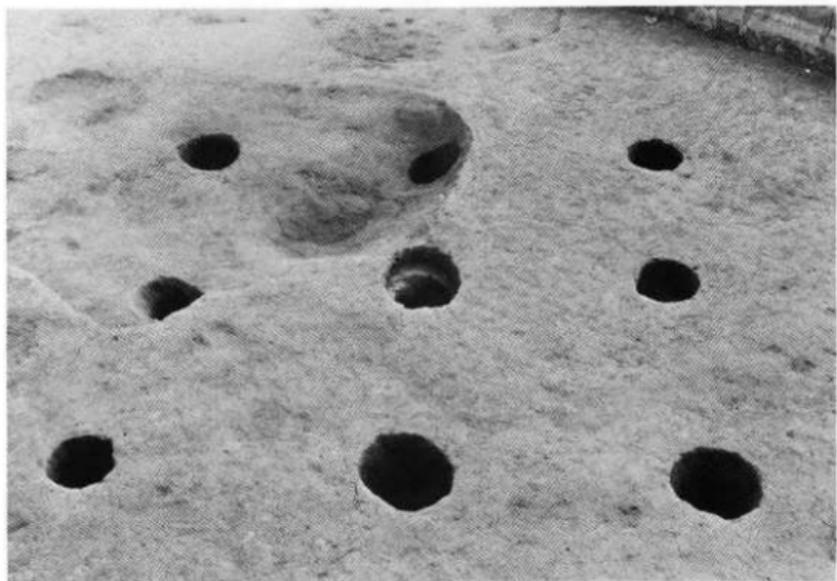
a S D 01全景（東より）



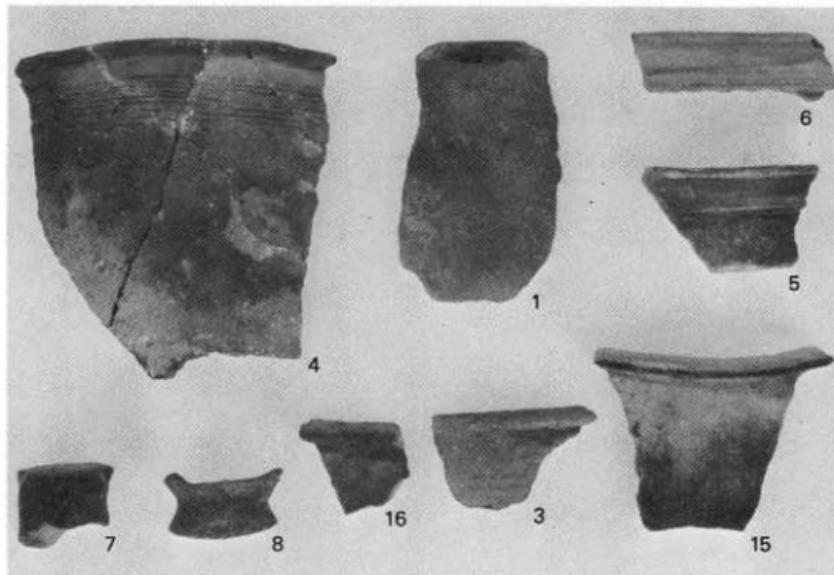
b S D 01断面



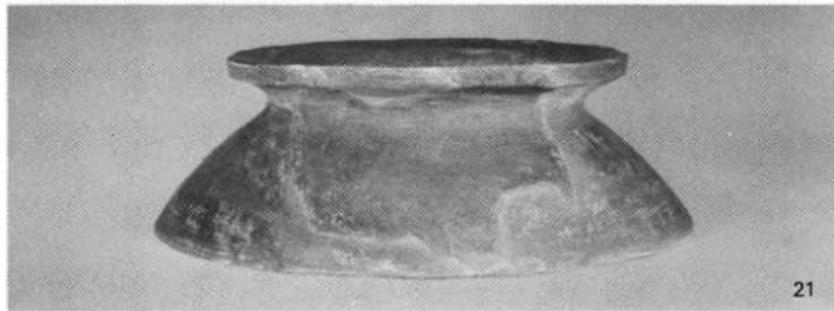
a SD 01土器出土状態



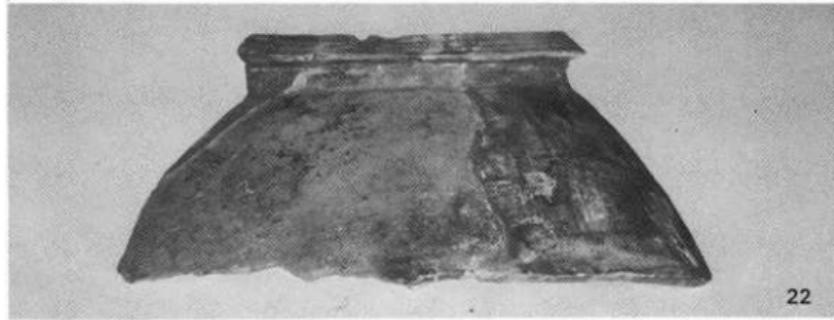
b SB 01全景（南より）



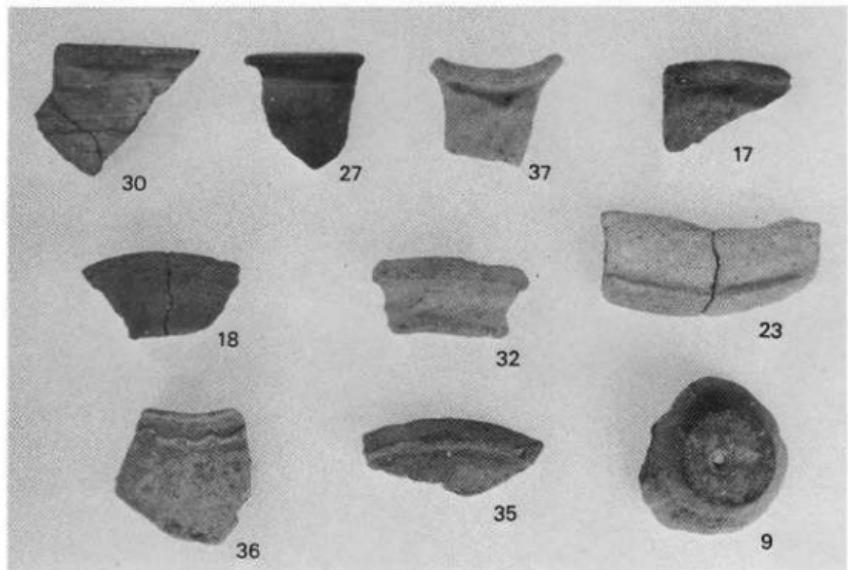
21



22



S D 03出土土器



a SD 03 3 T 出土土器



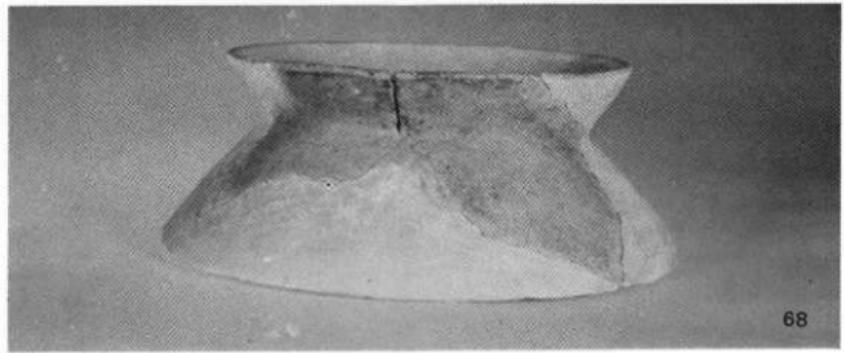
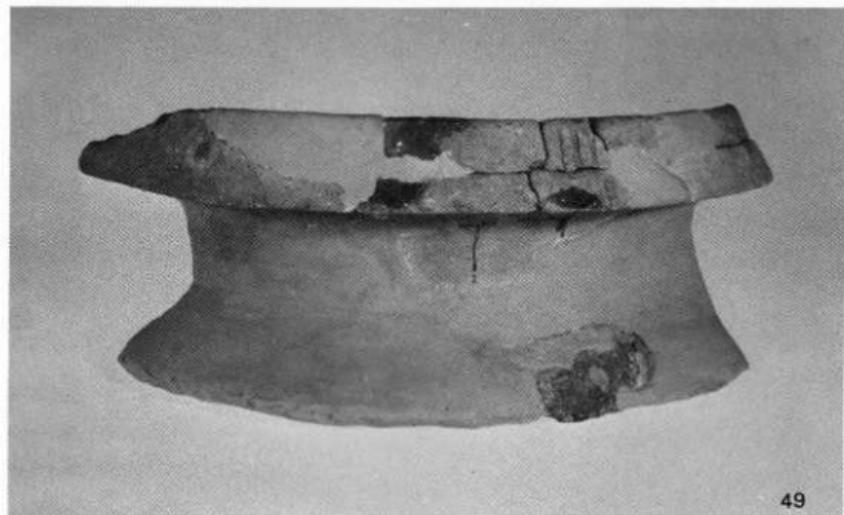
39

b SD 03 3 T 出土長頸壺

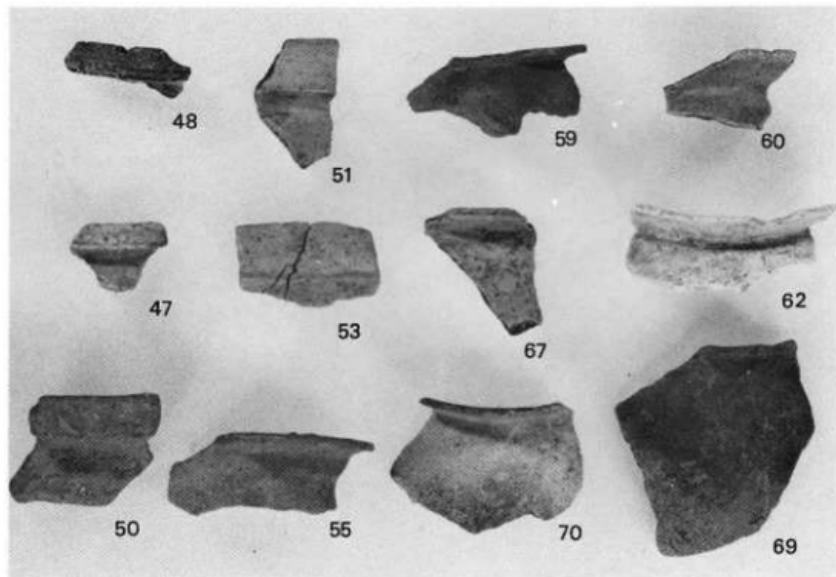


74

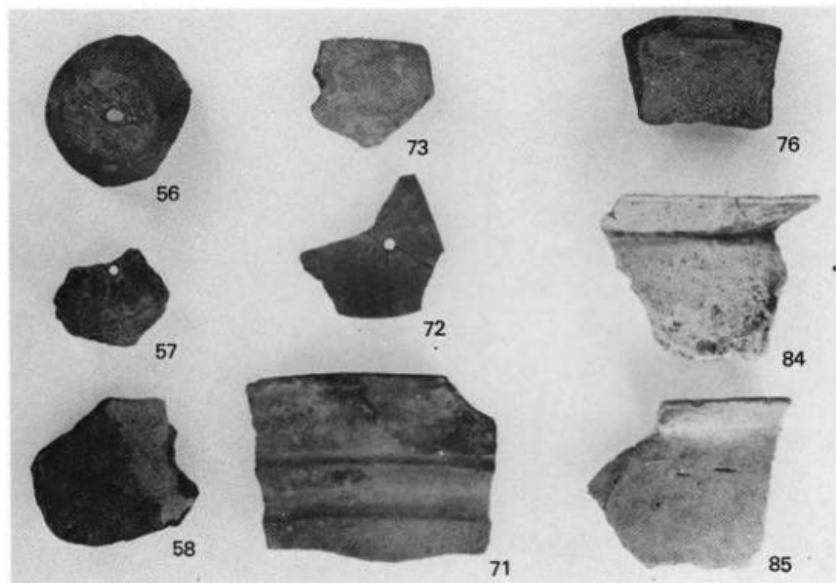
c SD 07 出土小型丸底壺



S D 07出土土器



a SD 07出土土器



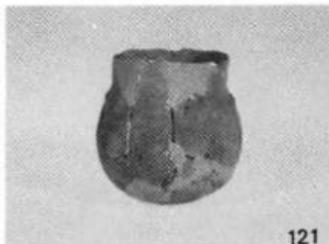
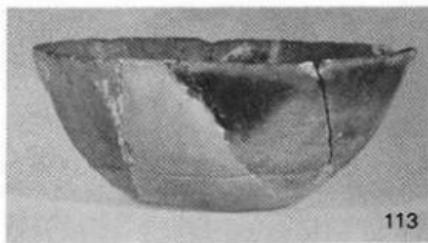
b SD 07, 01出土土器



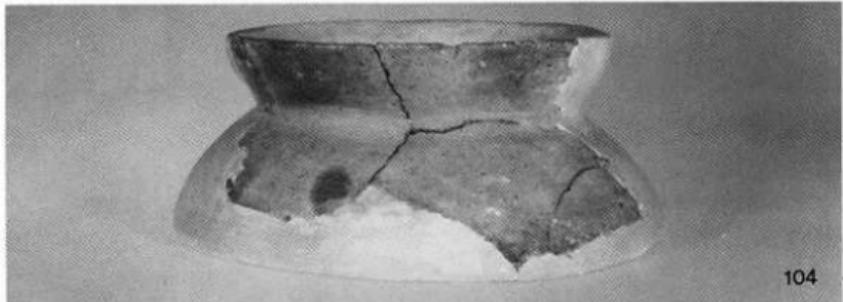
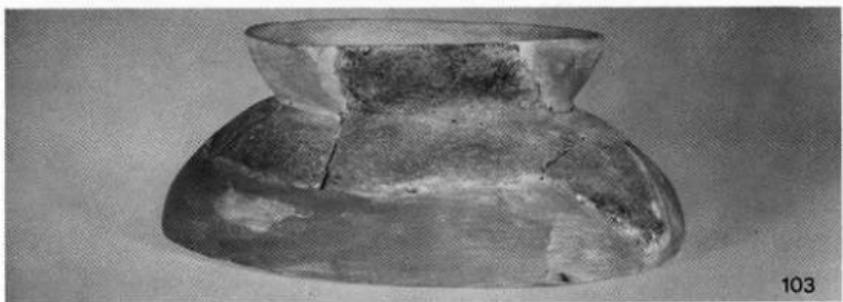
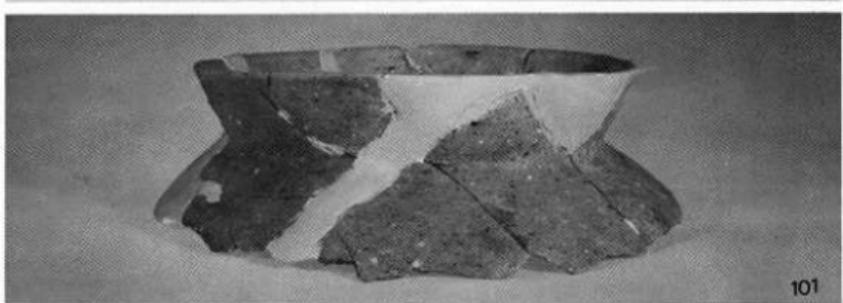
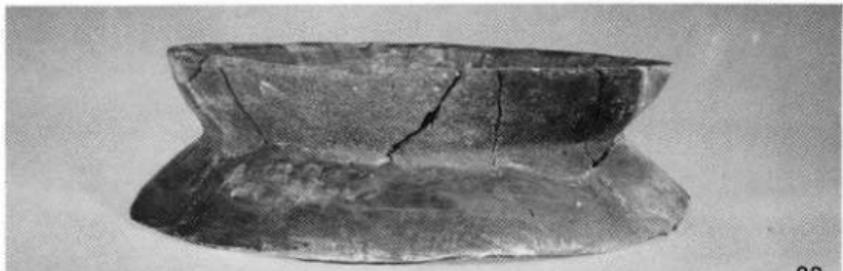
a S D 01出土土器



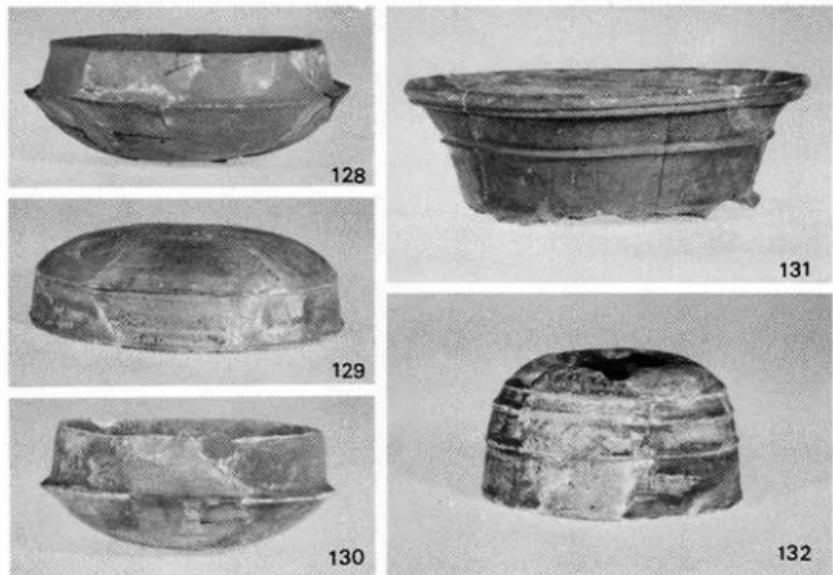
b S D 04出土土器



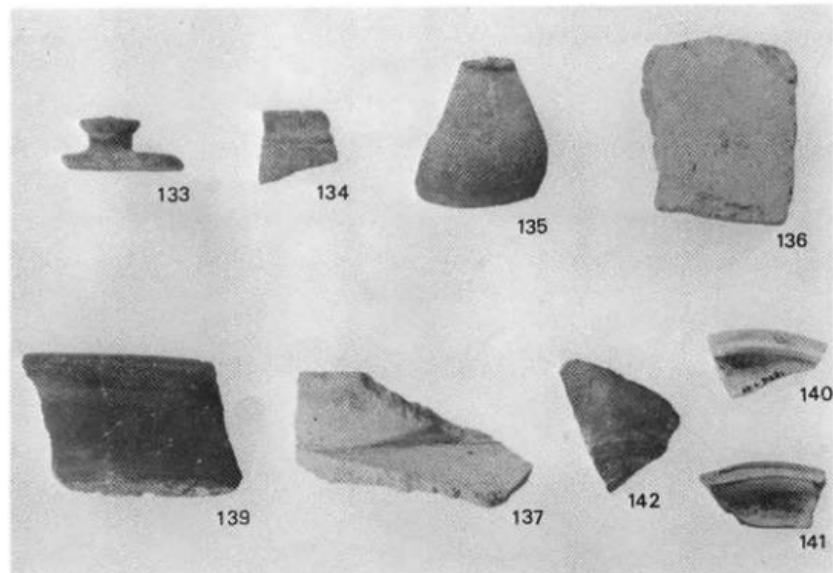
S D 04出土土器



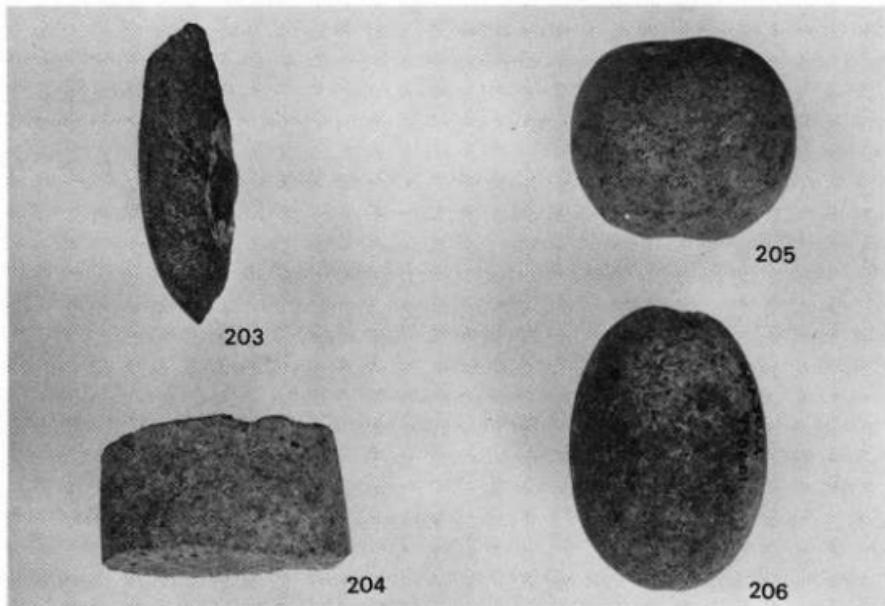
S D04出土土器



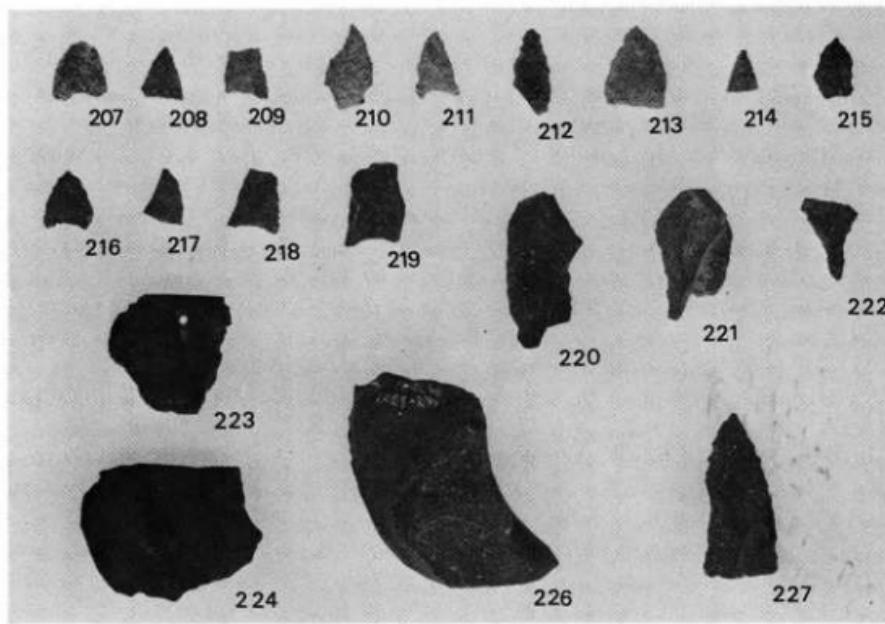
a SD04出土土器



b (上) SD04出土土器 (下) SD06出土土器



a 石器 (1)



b 石器 (2)

1980年(昭和55年)3月

神辺御領遺跡

編集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター
広島市中区袋町5-14
発行 広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター
印刷 文化印刷株式会社